
魔法少女リリカルなのは 守るための戦い

吉田佳樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 守るための戦い

【NNコード】

N8519M

【作者名】

吉田佳樹

【あらすじ】

神との契約によってsttsの世界へ転生した主人公「ウイルズ・レータ」

原作どおりに進むのかと思っていたがなにやらそうではないらしい。スカリエッティのほかの組織が暗躍している。果たしてなのはたちの運命は

この小説は原作ブレイク、チートなどが含まれています。初めての小説なので、至らないところもあるかもですが、よろしくおねがい

します。

プロローグ（前書き）

転生した理由と、転生初日を描きたいと思います^ ^
初めての作品でへたっぴですが、あつたかい目で見てください^ ^

プロローグ

僕、「ウイルズ・レータ」は旅行中だった。夏休みを利用した暇つぶしのつもりだった、けど、不幸にも僕は震度7の大地震に巻き込まれ、あっけなく建物の下敷きになり 虫の息。。。

やつべ、もう死にそう。。。あー親とかどう思うかね。まあ、いまさらどうしようもないか（笑）

なんて思っていたら、田の前が明るくなつた

あれ？まだ夜のはずだけど、もしかして救助隊の人？

「ゲホッ（おーい）ゲホッ（おーい）」やつべ声でねーや、まさかこんな早くに死ぬなんてな。。。

惨めだぜ。。。なんて考えてたら、田の前の光から

「あなたは生きたいですか？」と聞かれた

「ああ、もちろん。て言つたあんた誰だよ！」と軽く突っ込んでみると、

「ワタスハ神です。あつ嘔んじやつた（汗）ゴホン（咳払い）私は神です！」

へえ～神様にドジっ子がいたとは！

てかそこは置いといて、「で、その自称神様がこの瀕死の僕に何の

「どうですか？」

「私はあなたにもう一度生きて欲しい。そして、救つて欲しい世界がある」

「世界を救え？ちょっと、僕はそんな『大層な人間じゃないすよ（笑）』ちょっとオタクが入つただの高校生です」

「いいえ、あなたは救うことができる。不幸な人を幸せにできる。だつてそうでしょう、あなたは相当なお人よしだもん」

「だもん、じゃない！まあ、確かにお人よしだけど、それとこれにどんな関係が」「つべ」）べ言わない、あなたは生きたいの？それとも死にたいの？どっち？」生きたいですよ！」

ちえつまた面倒に巻き込まれた！

「そう、じゃああなたに2つ目の人生をあげます。そして、「リリカルなのは」の世界へ転生してもらいます。いいですか？」

「はい、わかりました・・・つてはい？」「どうしました？」

「リリカルなのはの世界ってどうこういふとよ、あれってアニメの世界でしょ？」

「いいえ、あなたの世界ではそれでも、別のところではしっかり世界があります。しかし、その世界が最近危なくなってきた・・・、だから、あなたに転生してもらいます。」

「まあ、わかりましたよ。でも、僕には魔法の知識や強い特技なん

てありますよ?」

「まあまあ、そこらへんは神の力で何とかしつくわ。楽しみにしておいて。」

「たのしみについて・・・まあ、頼みますよ」

「じゃあ、心の準備はいいかしら?」

「はい、お願ひしますー。」

「じゃあ、いつてらっしゃいノシ未来の救世主ー。」

「はあ、かつたりい」

こんな経緯で僕は今ビニにいるのかといふと、地球の海鳴市。つまりなのはの故郷だ。

そしてなぜか、体が小さくなつた気がする。時期的には2期が終わつた頃らしい。

う~んこれからどうしていく。

そうだ、まずは、神様が行つていた能力つてやつを試そうじゃないか。いやあ、いい暇つぶしだ^_^

結果からいうと、2つ目の人格が植えつけられ、とある物語の主人公ぐらいの吸血鬼の能力をもらい、これまたとある物語の第一位のベクトル操作をもらつた。しかしへクトル操作はフル稼働で30分ほどしか使えず、吸血鬼の能力もちょっと傷の直りが人より早い程度。2つ目の人格なんて、ハルヤさん見たいで怖かつた。まあ、

あの人ほどツンではなかつたが、凶暴なのは確かである。まあ、整理すると、どれも微妙で使い勝手が難しい。まあ、前世で好きだったアニメのキャラの能力だつたからいいかな＾＾；

さて、これからどうしよう・・・。途方にくれていると、田の前を見知つた顔が通つた。（まあ、知つてるのは僕がアニメで見ただけだけどね）

そつ、リンディ・ハラオウン提督である。

「あの～」 緊張氣味

「何かしら」 一いつ口と笑顔で

「僕を養子にしてください！」 土下座

「あら大胆ね、でも、養子は無理かな・・・。今フェイトさんもいるし。」

ああ、そうか、そういうえば今はそういう時期か。

「でも、まあ、小さい子が一人の夜道も危険だし、今日ははつちに泊まつていきなさい」と笑顔でいつてくれた。

あなたは女神ですか！と一瞬思つてしまつほど美しい笑顔だつた。

その時！リンディさんの背後の男が、突然リンディさんに向かつて銃を発砲した

リンディさんは「！」では魔法があまり使えない。なぜなら地球には

魔法が存在しないからフュイトのためにあまり非現実的な行動ができないのだ。

「は仕方がない。

僕はぐびにある電極のチョーカーのスイッチを戦闘用にオンにした。

そう、ベクトル操作。

結果、銃弾は反射され男の手に当たった。男は自分の手を見て何が起きたのか把握しきれず呆然としていやがやがて、手から来る激痛に耐えかねて咲き美ながら逃げていった。

「あなた今のはなに？」とけよつと真剣な顔つきで聞いてくるリンディさん

「詳しく述べる。リンドイさんの家に行つてからお話しします。あつ自己紹介まだでしたね、僕はウイルズ・レータです。よろしくお願ひします」と誠意一杯の笑顔で挨拶した。

その後、リンディさんの家で、クロノ執務官、フェイトさん、リンディさん、に転生経緯から、自分の持つ能力まですべてを隠さずにはなした。そう、ここで話したことで僕の物語は急速に進み始めるのであった。

プロローグ（後書き）

佳樹>皆さんには、プロローグいかがでしょうか、もっといろいろ書きたかったんですが、まだ初めてということで勝手がわからずこんな駄文になってしましました。すいません。

ウィルズ>そうそう、はじめは軽い自己紹介程度のはずだつたん

だけど、この日と文章書くの下手だから・・・。

佳樹>次はがんばります・・・。

ウィルズ>それでは次回始まりは突然に

ウイ・佳>新たな物語へtake・off

始まりは突然に（前書き）

ついに、というか、いきなり本編に介入します。
いい文になるようできるだけ努力するので、応援お願いします。

始まりは突然に

リンティさんに出会って早くも2年後

僕は今管理局で働いている。もちろん能力は隠している。一人のとき意外は使わないと決めているからだ。

ちなみに今は11歳（転生した時点で9歳だったらしい）、位は一等兵まあ、妥当といえば妥当。死にそうな仕事もなかつたしこれと云つて秀でたところがないので、これでいいだろう。

そして、今日は、あのなのはさんと一緒にミッションに参加する。

「ヤッホーい、ヤッホーい」と一人宿舎で喜んでいた。

しかし、僕は忘れていた、闇の書事件から2年後の悲劇を、そして、自分で決めた戒めを後悔するということを

今日は管理外世界で、異質物の捜索だった。そう、あの事件の日だった。

現場に到着して気づいた。今日は、なのはさんの人生にかかる重大な事件が発生する日だった。

突然現れた敵に襲われ、大怪我をする日だと。

そして、数時間後、目的を終えて帰ろうとしたとき、なのはさんの小さな体から爪のようなものが飛び出した。

なのはさんは、レイジングハートで応戦しようとしたが、傷が深すぐちうまく戦えなかつた。

ヴィータさんは、なのはがされたことに困惑して動けなくなつてゐる。

そして、未確認の敵は、なのはさんにトドメを刺そうとしていた。

仕方がないか、と僕は小さく笑つた。

みんなの前では使いたくなかったんだけどな・・・。

支給品のストレージタイプじゃ勝てるはずもない。

そう呟きながら首のチョーカーに手を回しスイッチを入れた。

そして、足の運動のベクトルを操作し、一気になのはさんのもとへ向かつた。

しかし、これでも、敵が先にトドメを刺すか、ギリギリ間に合ひつかだ。

結果はギリギリ間に合わなかつた。

なのはさんが死んだつて？

オイオイ勝手に勘違いすんなよ。生きているよ。

僕は突き刺されながら勝手に突っ込んでいた。

「いてえ、洒落になんねえってこれ、

吸血鬼の能力追いつくかな・・・。

なんて楽観的な考え方をしていた。

「そう、ギリギリ間に合わなかつたが、捨て身で僕が割つて入つたことにより、なのはさんはどうにか、死なずにすんだ。」

「はあ、よかつた。」

「世界が崩壊するかもつて、なのはさんが死ぬからかな、これで死になければアニメ第3期みたいに解決してくれるよな。とおぼろげな意識で笑っていた。」

すると、ヴィータさんが

「「オイ！死ぬな！お前が死んだら、なのはが悲しむだろ！生きろよ！」とか何とかいいながら体を揺すつてている

「あーやべつ意識がもうもたねー。」

案外短い第2の人生だつたな。と思つた瞬間。体の中のもう一人が目覚めた。

「「オイ、ウィルズ、勝手に死んでんじゃねえぞまったく。こんな小娘のために死ぬなんざあ俺はごめんだ。だからさあ、体貸せよ！」」

「ウイルス、やめろ、から・・だが・・もたねえ」

「アン?」この敵ブチ壊せばいいんだろ?速攻でかたづけてやんよ!」

そういつた瞬間、体の主導権は、僕の半身ウイルスにとられ、凶暴的な人格が表に出た。

そばで体を揺すっていたヴィーターが

「オイ、やめるよおめえ死ぬ氣か!」と声を荒げた

「うちやうちやうせんだよこの三下が!、こんな小娘一人が指されたくらいで動搖しやがつてよ。おかげで俺が死にそうじゃねえか。つたく、めんどくせえからとりあえずザコは引っ込んでろ!」

そういうと、ウイルスは、敵に向かつて一気に加速した。

そして、敵をめちゃくちゃに壊し始めた。それはもう地獄といつていいくらいひどい光景で、実際吐いていた人が数人いたくらいだ。ベルカの騎士のヴィータでさえちょっと涙目だ。

「オイビうしたもつと抵抗しろよ・・・。つまんねえなあ・・・。

「ウイルスもうやめてくれ、頼むから」

「あん?今いいところなんだよ!」

「頼むからもうやめてくれ!」

「つたくじょうがねえな、お優しいウイルズさんにはかなわねえよ

「ふう」と僕は安堵した。だが、僕はウイルスという人格悔っていた、買いかぶつていた。

「なんていうと思つたか？そんなことはしねえよーほり行くぜー楽しいよなーなあーウイルズ！！！」

とウイルスは狂気のような笑みを浮かべながら、敵の内部の機械のベクトルを一気に逆にして、粉碎した。

その場にいた全員がこの世のものではない顔で僕を見た。

管理局に戻つてから、ヴィータさんやフロイトさんやはてさんに守護騎士の皆さんに問い合わせられた。

「オイ！さつきのはなんだ！？お前死にそうだつたのによーいきなり立ち上がつて大量殺人者みてえになつてよーしかも、あの魔法は何だ？敵の攻撃を反射してるみたいだつたぞーそれに、今お前怪我が治つてるのはどういうことなんだ？オイ！答えるよー！」

「少し冷静になれヴィータ」とシグナムがなだめる。

「まあ、まずはなのはなちゃんと助けてくれてありがと」

「うん、なのはを助けてくれてありがと」

とはやてさん、フロイトさんにお礼を言われた。

「でも、自分のあの力はいつたいなんなん?」とはやてが聞いてきたので、僕は包み隠さずしゃべった。もちろん他言無用をお願いしてだ。他に一緒に言った回覩には、「こきなりの」とで氣が動転した」と誤魔化しておいた。

「僕、元々この世界の人じゃないんですよ」とこきなり話し始めた。それから、ベクトル操作、治癒能力、反射を司るもう一人の人格（ちなみに思考は僕だ。）の話をした。

皆信じられないかわいな顔をしていたが、現に田の前に証拠となることを田撃しているので、何の反論も異論も出なかつた。

「お前意外とす」「こやつだつたんだな」とカイータ

「一度模擬戦をしてみたくなつた」シグナム

いや、あなたに勝てるはずないじやないつすか

「とにかく、自分悪いつけやあ、あなたの半身めつせりわいで」

「でも、なのはを助けてくれてありがと」

はやてさんに釘を刺され、フロイトさんにもう一度お礼を言われた。

「いえ、自分にできることをやつたままで。そういうばなのはさん、いつの間にか覚めるんでしようか?」

「ああ、今もう止めどるがしこけど、あしたにしてやつてくれへんか?」

「わかりました。いやあ、今日は」「迷惑をおかけしました。では、改めてあしたお見舞いにでも行つてきます。」

「ほんならなあ」

「じゃあ氣をつけて」など、皆別れの言葉を言つて帰つていった。

宿舎にて

「オイ、何でかつて死のうとしたんだよ！俺はまだ死にたくないんだよ！」

「ウイルスでも、あればやりすぎだろ？もうちょっと手加減を」「うるせえ、お前がへましなかったら、もっと余裕があつたんだ！」あーわかつたわかつた。誤るよすまねえ。口々で相談なんだが。」

「アンなんだよ。」

「これからはさ、戦闘中一緒に行動しねえか？だつて思考と反射がばらばらつて不便でしょ？」

「まあ、それもそつか、わかつた、いいぜ」

あらぬ意外とあつたらづいてくれた。

確かガンムではもつと手こずっていたような・・・。

でも、まあいいか、これで、一気に戦闘能力が上がる。

なんて考へてゐるけりに、眠くなつてきた。

あしたしつかりお見舞いに行ひ。

そう決めて僕はベットに入つた。

始まりは突然に（後書き）

佳>はい、皆さんこんにちは、今回もいろいろと日がないところ
がある文章にお付き合いいただきありがとうございました^ ^
ウイ>はい、出ましたね^ ^相方登場！これから真の超 ですね^ ^
それにも、デバイスつてまだストレージタイプだつたんだ
佳>そうですね、stsに入つたときに、新しいやつに変わつてい
ます。

ウイ>そいつは楽しみだな^ ^
佳>それでは、また次回に
佳・ウイ>Take・Off

遂に機動一 よりやく手に入ったインテリジェントバイス（前書き）

ようやく、主人公にデバイスができます。

もひすこじで、S-Tの本編に絡み始めます。

今回までの下準備です。

遂に機動！よつやく手に入ったインテリジェントバイス

僕は翌朝、なのはさんのお見舞いに行つた後、本局に呼ばれ、なのはさんのミスを隠すために濡れ衣を着せられた。

「君の独断によるミスといつことにするがいいかね？」と名前も知らないおっさんが聞いてきた。

「はい、結構です。そのかわり、無人世界への任務をくださいませんか？」と聞いた。

「そのようなものでいいならあげるよ。ほどぼりが冷めるまで、無人世界にいるといい、本当はこんなまねはしたくないんだがね。これも、管理局の未来のためだ。許してくれ」

「はい、高町なのはさんは自分の未来のためにには仕方がないですね」とちよつと苦笑いしながら答えた。

ハハハ・・・・、わかつていたが、まさか、ほんとに隠蔽するとほ、悪い噂だけは立つてほしくないんだけどな・・・・。

そう思いながら、その場を後にし、僕は、無人世界へ行くための準備をし始めた。

「え～っと、服はもつたし、食料も管理局がちよくちよく持つてきてくれるけど、後何がいるかな～？」

なんて考えていると、

「あつ、なのはさん助けたときに自分のデバイス置いてきた……。ヤバつ、もう一本もらひことはできそつもないしな……。しゃあない自分で作るか。」

僕はいろいろと考えながらデバイスを作り始めた。

せつかくだから、ストレージタイプじゃなくて、インテリジェントデバイスにしよう！

うん、そのほうが無人世界でも寂しくない。

とかなんとか、ぶつぶつ呟きながら、デバイス作りに没頭していく。

そして、数日後、なんとかデバイスが完成。

形状はといふと、僕自身の戦闘スタイルに合わせて、オールレンジ対応で作ってみました。

「管理者機能フルオープン。」すると、僕の足元に、青いミットチルダ方式の魔方陣が広がる。

「トリシューラ・ユニバース！セット・アップ！」

そうすると、バリアジャケットに変身するのですが、なんというか、あまりイメージが浮かばなかつたので、前世ではまつっていたゲーム、モンンのギルドナイト蒼の頭だけつけてないものを想像して、バリアジャケットとして設定した。

うんうん、うまくいった。

さて、早速、出発しますか。

と出発する前に、僕の「テバイス」についてひとつと説明しよう。

この「テバイス」は、神話上の武器トリシューラといふ三叉槍の形状を元に、カートリッジシステムを搭載し、どこまでも無限にという意味をこめて後ろにユニバースをつけた。

性能は、そのまま槍として近接戦闘にも使えるし、魔法の杖としても使える。

フォルムエンジについてはおおい説明します。今は第一形態で十分戦えますから。

そういうしてゐ内に、目的地についてしまった。

任務は、ロストロギアの確保。

それじゃあ、行つてきますかね。

若干11歳で無人島暮らしあつらうがこれからがんばっていきますか。

一日目は、無人島探索をしただけで終わってしまった。

案外食料とかあるんだね。意外だつたは（笑）

でも、探索の途中で見つけた真新しい研究所、口ひつて誰もいないはずじやなかつたつけ？

まあ、歴史からあしたか「アサヒ」を中心にロストロギアを探していく
まじょひ。

あーあー、疲れたから今日は寝よつ。ねやすみ

「ねやすみなさい、マイマスター」

「うそ、ねやすみー···ってオイー···まわりばへんタコシユ
ーラー！」

「なんでじょひへ向かう不満でも？」

「あつません。」「めんなさい。」

は、あ、機動初日からこんな感じか、まあ、仲が悪こよつ良こに越し
たことはないか。

まずは、あしたに備えてしつかり寝よつ。

遂に機動！よつやく手に入ったインテリジェントバイス（後書き）

グダグダでじめんなさい。

やつと、起動しましたね、トリシユーラ。

次回からは、いよいよ、六課に絡んでいきます。

一気に年が飛びます。

やじりくんばじア承ぐださい。

それではまた次回へ

take・off

接触！！戦闘機人プロト〇！（前書き）

ちょっと短いですが、戦闘機人との接触を書きたいと思います。

接触！！戦闘機人プロト！

翌朝、僕とトリシユーラは研究室に潜入した。

それからしばらく進んでいると

「うわあ、やつぱ不気味だなあ」

「そんなこと言つてゐる場合じゃありませんよマイマスター」

「そのよつだな」

よく見ると、前から誰かが歩いてきた。

おんな？

「ドクターがあなたを欲しがっています。」

「なぜ僕が必要なんだ？」

「分かりません。ですが、命令には忠実に動くのです。」

僕が知つてゐる戦闘機人とは少し違う。試作機だからだろうか、感情がないように思われる。

「僕がついて行かないといつたら？」

「力ずくで連れて行くまでです。」

プロトのはやうこつと、すいこ速で僕に突っ込んできた。

「クソッタリショーラー！」

ガキン！――

なんとか受け止めた、しかし

「クツ――！」 手じわい。試作機でも、オーバーハランクぐらいありますしね。

ちなみに僕はAランクね。

「速攻で終わらせるしかなれやうだね。」 そういうながら、ぼくはチョーカーに手を回した。

直後、僕はベクトル操作を手にした。

ゴバ――！

地面が盛り上がり彼女に襲い掛かる。

「ひい――！」 少し顔が引きつった。

びつせり恐怖はあるじこ。

「一気に片付けさせてもらひつよ。」 静かにさうこつと僕はベクトルを下にして加速した。

「これでチョックメイトだ！」

プロトロはものの見事に吹き飛んだ、案外早く片付いたな。

でも、うわあ、さすがにやりすぎたな、でも、まあ良いか、早く管理局に

「ぐああ……」なんだこれ？痛い？なぜ？

よく見ると、プロトロは僕に向かつて最後の力で魔力弾を打ち込んでいた。

「せっかく殺さなかつたのに……、お前は……オマエは――――――――――――――

僕はそういうと、血だらけの体で、プロトロに向かつていった。そして、その直後、辺りが静寂に包まれた。

それから、8年後

ついに、六課に転属になった。

接触！！戦闘機人プロト〇！（後書き）

中途半端ですね。でも、これでいいんです。この中途半端な終わり方が、後々つながっていく予定です。

本当は、もっと早く更新できる予定でしたが、なんと2度もエラーになつて、内容が全部パーになつてしましました。

だから、今回は、予定より大幅にカットした、内容で書かせていただきました。

六課に転属したときの話は、また次で書かせていただきます。

それでは次回へ take off

六課初回～意外と個性きついね、このメンバーは～（前書き）

今回は、平和的に、日常風景を書けたらと思います。

でも、ちょっとバトルがあるかもね（笑）

六課初日～意外と個性きついな、このメンバーは～

「あれから八年か」

そう呟いて歩いてきたのは、僕こと、ウイルズ・レータ。一応階級も三頭空尉まで上がり、ランクもA Aまで上がった。僕が今ビームにいるのかというと、六課の隊舎前。結成から一週間たっている。

なぜ一週間もたつてこらるのかといふと、正式な転属命令がなかつたので、無理やり転属命令を出してもらひつた。

うん、ちょっと荒事をしてきたけど、良いよね？

「ああ～つて、早く八神部隊長に挨拶してこないと……ん？」

「なにやうじ回りうづから爆発音やうじらが聞こえる。教導？」

「行つてみるか？トリシュー！」

「お好きにビリうづ！」この八年でトリシューはかなり仲良くなつたメで話せる仲になつた。

トリシューもこいつら、行つてみよう！

↓ sadefW陣へ

ティア「射撃型無効化されたからつてはつですかつて、引き下がつてぢや、生き残れないのよー！」

ティア「スバル、上からしとめるからそのまま追つて」

スバル「おつ……」

ティア「砲撃の弾丸を、無効化される魔力フィールドで膜状にくるむ。フィールドを突き抜けるまで、外殻が持てば、本命の弾はターゲットに届く……」

なのは「フィールド系防御を突き抜ける多重弾核射撃、AAランク魔導師のスキルなんだけどね」

ティア「固まれ・・・固まれ・・・固まれ・・・固まれ・・・固まれ・・・
ああ！…バリアブルシユート！…！」

スバル「ティア！」ナイス！ナイスだよティア！」

ティア「ハアハアハア、うるさい、うるさい・・・ハア、このくら
い当然よ」

s a d e F W陣了

「おお～やるねえ。」と僕は素直に賞賛した。

だつて僕と同ランクのスキルだぜ？

なのは「あつー・ウイルズ君いたんだ？」やつと氣づきましたか（笑）

「さつきからね、はやて部隊長は？」

「今いないんだよねえ、夜には帰つてくるらしいけど」

「うわあ、すっぽかされた」

「にやはは、それは不幸だね。」となのはが笑つていると、モニターの女性が

「あの、なのはさん?」この子は誰ですか?」

「この子つていうな! これでも僕はなのはさんと同じ年だぞ! ……」「どーセ僕は小さじですよーだ。フン

「えっと、ウイルズ・レー・テ三等空尉……私の命の恩人かな。」

「えつ? ジャあ、8年前、なのはさんを助けたのって、この人ですか! ?」

どうやら彼女、シャーリーは知らないらしい。それもそうである、この件は隠蔽されたことであるからだ、だってそうだろ? ハースオブエースの経歴に傷なんかつけたくないだろ。

「なのはさん、そちらの方は?」FW陣が帰つてきてたみたい。

「うんっとね、簡単に言えば、恩人。詳しくはプライベートだからこれ以上はいえません。」

「恩人つてす! 」とHリオが口をきりきりしながら言つてくる。

「いや、大したことはないよ。僕なんて、なのはさんに足元にも及ばないもん。」

「うそついたらだめだよウイルズ君。本とはもつと強いくせに。」
となのはが肘で僕を小突いた。

「そんなにすゞいんですか？」とキヤロ

「ぜひ戦つてみたいですね！」と元気にスバルが言った。

「さつきの多重核弾すゞかつたね。」と僕がティアに話しかけた。

「こなんのできで当たり前です。」ときっぱり言われてしまった。
うーん嫌われた？

「そんなことより、なのはさんの恩人つて本当ですか？そんなに強
そつには見せませんけど。」

いきなり突っかかれても。

「ティアナ、そなこといつたらいけないよ

「ティアナは一度言い出したら聞かないからな、わかつたよ、でも、
スバルとペアね？」

「何で、ペア？私一人で十分です。」

「良いからペアでやりなさい。でなきや、模擬戦はなしだよ？」

「わ、わかりました。」

オイオイ、当事者抜きで決めないで・・・。

そんなわけで僕は乗り気じゃないけど、模擬戦が始まりました。初日から全力全開なんて、不幸だ。

「あの~、なのはさん?どの程度までなつよつじのでじょうか?」

「うへん、ちょっとお仕置きもかねてるから、ベクトル操作までならOKかな。」

お仕置きつか、恐ろしいですね。

「なんか今よくないこと考えてなかつたかな?」

なのはさん、笑顔が怖い・・・。

まあ、とにかくベクトル操作までなら良いのか。かつたるいけど、はじめるか。

「スバル行くわよ!」

「うふ」と一人が向かってきた。

チヨ・カーのスイッチはオッケーッと。さて、ほんとにはじめるか。

「いっけえーーーーーーーー！」とティアナが魔力弾を複数打ち込んできた。

僕はそれを余裕でかわす。

「うおおりやああーー！」と今度はスバルが突っ込んできた。

「よつと」僕はトリシユーラで受け止めた。

「うん、いい感じだね、でも、ちよつとまつすぐ過ぎない？」そういふと僕はスバルにむかつて魔法を撃つた。

「マーキュリーファイヤー！！！」「ファイヤーっていう属性は氷だよ？何年か前にクロノさんに鍛えもらった。

「うわああ」とスバルはなんとかよけた。さつきスバルがいた場所には、氷の塊ができていた。

「うわあ、いきなり飛ばしてんなあウイルズ君は」とのはがこぼしていた。

そんなときにアリアナは、背後から魔力弾をうとうとしていた。

僕は足のベクトルを下にして一気に加速した。

「速い！？」ティアナが驚く。「でも、行くわ速くたつて！……」ティアナがすごい数の魔力弾を打ち込んできた。

「おいおい、そりや、Bランクの技じゃないだろ」と突っ込みながら、冷静に魔力弾のベクトルを逆にした。もちろん撃つた本人に飛んでいくわけで、

「うそー!?」とティアナは自分の撃つた技で自滅した。まあ、一応

僕が手を下してゐるから、自滅ではないんだけど、この際どうでもいい。

「ウイルズさんす」いです。」とエリキヤ口が絶賛。

「まだまだだよ。あやんと見てて。」 となるのはが答える。

「後はスバルか。近接同士、いつちょやりますか？」

「はい！お願いします！」

「うおおおおお……！」とスバルはウイングロード上を走ってくる。

迎え撃ちますか

「神・・列！」 そういうと、すいに速さで、僕はトリシユーラを動かした。

ガキン！ガキン！

と何度も打ち合っている。

「これについてくるとはなかなかだな。」と僕はつかの間の余裕を見せた。

「いえ」とスバルが必死に打ち合っている。

「さて、時間もかなりたつたし、〆にすつか？」

「え？」とスバルが驚いた顔をする。

「悠久なる凍土・・・凍てつく棺の地にて・・・永遠の眠りを『えよ・・・』そうすると、あたり一面に雪が舞い、地面が凍つっていく「あれ?なにこれ?」ティアナが目を覚まして困惑する。

「ちょっとウイルズ君、ストップ!!」となのはが叫ぶが聞こえない。いや、聞こえない振り。

「あわわわ」とスバルは逃げ場を失っている。

「凍つけ!!!!」

「エターナルコフイン」

「あ」となのはがいつた瞬間。あたり一面が氷で埋め尽くされた。

その後、

「だからストップって言つたのに。」となのはにお叱りを受けた。

氷は自分で溶かしました。

「ウイルズさん、すいませんでした。」とティアナが素直に謝った。

「いや、別に気にしてないから。」と僕は答えた。

「ウイルズさんすいです。」と他の3人からはいわれた。

「あの、さつきのあの力は何ですか?私の魔力弾をはじき返して。」

「あれ？ああ、あれは、魔力弾のベクトルを逆にしただけだよ。」

「ベクトルを逆に？」

「そう、僕にはベクトル操作の力がある。だからその気になれば、人の血液を逆流することだってできる。まあ、やらないけど」

「セ、そりなんですか。」とティアナは苦笑いした。

「セ、今日の訓練はここまで、みんな、また明日がんばろうね」となのはが解散の合図をした。

FW「ありがとうございます!」

「今日は、せやじやんもいないけど、これからどうする?」

「うへん、まずは食堂で食飯かな、なのはさんも行くんだつたら、先行つって。僕はやることがあるから。」

「ふへん分かったよ。じゃあ、先行つてるね。」となのはは手を振つて食堂のほうへ走つていった。

「セ、せやじやん出てきて良いんじゃないかな?怪しい不審者さん?」

「なにおー、不審者とは何事だい!私は不審者じゃない。」

元気な不審者だなおい。

「だから不審者じゃないつてば!」

「勝手に人の思考を読むな！」

「マスター、やりますか？」とトリシューラが割って入った。

「ああ、怪しいやつには事情をきかねえとな。」そういって僕はトリシューラを構えた。

「ほんとにいいすっか？私とやつても勝てませんよ？」

「そうだな、ちゃっかりエターナルコフインもよけてたしな。だけどね、あれだけが僕の取り柄じゃないんだ。」

「そつすか、じゃあやりますか？後悔してもしらないつすよ？」

「そのせりふそっくりそのまま返してやるよー。」

8年ぶりに僕は、戦闘機人と戦うことになった。

六課初回～意外と個性きついね、このメンバーは～（後書き）

はい、平和といつていたけど、最後はちょっと・・・。

でも、いいじゃないですか。

これからは、STSを軸に原作とはちょっと変わった進み方をするかもしだせません。

次回は、ついに、ナンバーズの一人と戦います。お楽しみに！

決戦？ナンバーズの実力とは・・・（前書き）

ナンバーズとの初戦闘！がんばって書きたいと思います。

決戦？ナンバーズの実力とは・・・

Side～ウイルズ～

「トリ・シゴーラ、ツインー！」

「ツインブレードフォーム」

「お前、6番(じゅうばん)とはセインか？」

「なんで、私の名前がわかるっすか？」

「いやあ、適当に言つたけど、当たつてたか」なんていつてるけど、原作知つてます。なんていえねえ。

「それにしても、なんかこの、田のやつ場に困る服装してんだな」

「な／＼なにいつてんすか／＼」とセインは顔を赤らめた。

「どうした？」

「セクハラっす／＼」なおも赤面しながら、反論してきた。

「そんなつもりじゃない。ただ、美人はなに着ても似合(うふんだなつ)て言おうと思つただけなのに。」

と僕は、笑顔で返した。

「うう／＼」とセインはなにやら唸つてこる。

「男の人にほめられたの初めてっす／＼」とセインは心中で思つていた。

「まあ、こんな世間話はここまで、そろそろ始めますか。」

「そもそもすよ」とセインはあわてて言い返してきた。

「やる気十分だねそれじゃあ・・・広域結界！」六課の隊舎前が結界に包まれる。

「これで思う存分やれる。」と僕は言いながら、チョーカーの電源をオンにした。

「ほら、おきるー、ウイルス、お前の出番だあ」

「あん？ 敵さんか？ しかたねえな。」照れがくしつすかウイルスさん。

「んじゃあ、あの女に見せ付けてやらないとな、本物の超兵つてやつをな！……」とウイルス

「いぐぞー・セイン、30分で終わらせろ

「やれるもんならやつてみな！」

セインも本氣か

「ウイ・セ」「はああああ！……」一人の死闘は始まった。

side～ウイルズ～out

side～六課メンバー隊長たち～

なのは「ウイルズ君、ちょっとやることがあるっていってたけど、何なんだろう?」

フュイト「あつなのは、お疲れ、ウイルズ君が今日から転属って言つてたけど、どう?」

なのは「えつとね、」と今まであつたことを話した

フュイト「やる」とね、転属初日に仕事なわけないから、まさか!?
?敵?」

なのは「そんなわけないよ～」

フュイト「そうだよね、いくら不幸体质のウイルズ君だつて、初日
に敵と戦うなんて・・・」

な・フュ「...?、結界」

なのは「まさかね～」

フュイト「うん、まさか」と一人は苦笑いしてるのが精一杯だった。

side～六課隊長陣～out

s.i.d.e～セイン～

「おいおい、逃げてばかりじゃなくて、もつと攻めないと、ほり」

田の前の男がそういうと

「ぐつー！」田の前から砲撃が

「これじゃあ、じつちが不利つす。ヒューティープダイバー」

「ほほう、それがさつきヒターナルコフайнを避けた方法か」

「これで一つの後ろに回つこんで首を」とセインは地面を移動しながら、ウイルズの後ろに出た。

「これで……！」

s.i.d.e～セイン～out

s.i.d.e～ウイルズ～

「これで……！」

「避けられねえな。 なあ？」

「そうだな、だが、避けて見せろオオオ！……」

「なー？」かわした、確實に

「さて、今度はこっちの番だな。」

「いくぞ！ カートリッジロード」

「ロードカートリッジ」 カシャンカシャンと「氣味のいい音を鳴らしながら僕はカートリッジを2発ロードした。

「ちょっと、いたいの我慢しろよ・・・」 せつこうとあたり一面に魔力が浮かんできた

「こんなにバラまいたか」 その魔力は一転に集中していく

「集束砲・・・だけど、HS、なに？ バインド？」

「」 ちはあまり時間がないんですね、一気に終わらせてもうう。

「いくぜ！」 これが俺たちの全力全開！』

「エターナル・ブレイカー」

ドゴオオン！――直後一帯に大きな音が響き渡った・・・。

決戦？ナンバーズの実力とは・・・（後書き）

セイン戦終了です。

次回は、セイン戦後口談でも書きたいと思います。

戦いの後・・・。(前書き)

セイン戦の後日談です。ちょっと短いです。

戦いの後

「はあはあはあ・・・大丈夫か?セイン」

返事がない・・・やりすぎちゃったかな。

「おーい大丈夫か？」肩で息をしながら呼んでみる。結界なんてもう壊れてるから、外に丸聞こえだ。

「マスター、氣絶します。」

「ああ、おーせりは、ほつやつすがたみたいだね。」

うん、やりすぎだつたのは認めよう。
威力的には、なのはのS-L-B
と同等ぐらいただもん。

「よつと、セインをちょっと医務室につれてくは」そういうながら僕はセインを抱え（まあ、持ち方は仕方がなくお姫様抱っこになつちやつたけど）、医務室まで移動する。

「あれ？ つてええええ！？」セインが目を覚ましたらしいな

「ちよつと、これでいいことか……？」となにやら顔を赤らめていた。

「ああ、あらかじめ僕もやりますきたからね、お読みといつたら何だけ
ど、ちょっと手当てするよ。」

「だからって、なんでこの抱え方／＼」ん？最後のほうがちょっと

聞こえなかつた。

「え？ なんだつて？」と聞き返すと

「なんでもない！／＼」と真つ赤な顔で言い返された。

うへんぢりしたんだる。

「マスターも罪な男ですね」

「ん？ 何か言つた？」

「いえいえ何も。」

セツルーハウスに医務室についた。

「ちよつとわざと座つててな。」

とセイインを座らせ、シャマル先生を呼びにいった。

「シャマル先生ーーちよつと手当をして欲しい子がいるんですけど。」

「はーはーーーちよつと待つてね。」

「わお、これまたすごい子ね」つん、そりだよね、だって、ナンバーズのスースのまだもん。

「あのーその、よろしくお願ひします。」

「それよつもぢりしたの？ 体に別状はないけど、かなり傷ついてる

みたいだけど、何かあった?」

「いや～その～なんといいますか、ねえ、セイン」

「えつ? こきなり私に振る?」

「もしかしてわつきの結界に関係あるのかな?」シャマルさん笑顔が怖い。田が笑ってないよ。

「まあ、うそついても仕方ないですしね。そうですよ、僕とセインが戦つて、ちよつとぼくがやりすぎちやつたんですよ。」

「やつぱりさうなのね、バトルマニアでも、こんなに可憐に弱い女の子を傷つけちゃダメよ?」

「いやいや、僕バトルマニアじゃないし、「やもそも、か弱くないし、めめめ強いかから、あは、可愛いのはは認めるけどさ。」

「はい、もう手当では終わったわ、このことは、なのはさんたちに言つてもいいのかしら?」

「できれば秘密にしていただきたい。そつちのほうがいいだろ? セ

イン

「うふ、できればそれのほうがありがたい。」

「わかったわ、じゃあ、これは、私たちだけの秘密です。」まあ、結局この後なぜか隊長たち3人にはれて、お話というなの、暴力を受けたのは、また別の話。

「何で私のこと、上に言わなかつたんだ? 言つたらそれだけ情報が
『そこまで』え?」

僕はセインの言葉をせきりた

「セインが何でここに来たのか、なぜ、戦闘機人なのかとか、そんなの関係ないよ、ただ、僕が報告しなくていいと思ったからしなかつた。ただそれだけ。」

「でも」

「別いいよ、セインは元いた場所に帰りな、みんな待ってるんだろ?」

「うん、」

「じゃあな、またどつかで会えるといいな」と僕は微笑んだ

セインは無言で帰つていった。というか、地面に消えた。

「あの笑顔はさすがに反則だよーー」セインは改めて今田あつたことを、考えていた。

side～セイン～

「おかえり～セインちゃん～

「クア姉、ただいま」

「どうした、元気がないぞ」

「チング姉、今日、六課に潜入する直前に、バレてさ、そいつと戦つたんだけど、負けちゃって……」

「あらあら、そんなことがあったの～だつてドクター

「セイン、その相手とは、この男ではなかつたか？」

「ああ、そうそう、そいつだよ、なんかやけに優しくてさ」「といいながら顔を赤くした。

「あらあら、意外とイケメンね～」といつよりもかわいいかしら」と
クアットロ

「そうか、セイン、君は実にいい人物と接触した。今回の潜入はかなりよかつたな。」とドクターは笑っている

「どうしたつすか？」と他のメンバーたちも集まつてくる。

そして、その後、ウイルズ・レータという人物についての、ディスカッショ�이数時間続いたそうだ。

戦いの後・・・（後書き）

ナンバーズの口調は適當です。なんとなく覚えている範囲で書きました。

次は、六課の話になります。

それでは次回へ take off

じゅうと急用（前書き）

いつから、完全に原作から脱線していきます。

ちよつと急用

はやて「はあ、まあ、昨日の一件はもうええけど、これからまだもつ
やめて欲しいわ」

なのは「ちよつと、こきなり結界なんて張っちゃうんだもん」

フロイト「喧嘩なんてダメだよ。しかも、隊舎の前で」

「売られた喧嘩は買うだけだ。」 そう、セインが戦闘機人だつて事
は隠して、ただ喧嘩したということになつてい。だつてこんなに
早くから戦闘機人と接触したなんて言つたらこれから先どうなるこ
とやひ。

「はやて」「何や反省できてないみたいやな。なんなら、仕事増やした
ろかー」

「いあん、僕今日は急用があるから、仕事は無理。」

なのは「急用つて?」

「うん、ちよつと、無限書庫行つてくんだよね。」

なのは「ゴーへ君のとこへ。」

「うん、ちよつと話したいこともあるからね。じゃ、行ってきます
と僕は逃げるよつて隊長室を後にした。

「ユーノさん、こんちはー」

「ん？ああ、久しぶりだね、ウイルズ君」かなりつかれているみたい。だつて、田の下に尋常じゃないクマができるもん。

「ユーノさん大丈夫ですか？」

「大丈夫・・・って言いたいところだけど、正直厳しいね。」ハハと笑いながら答える

「よし、今日は仕事もありませんし、手伝いますよ。」

「いいの？じゃあ、お言葉に甘えさせていただくよ。」

それから、僕は、昨日のことや戦闘機人について、「これから起ころうる事について話しながらユーノさんの仕事を手伝った。

「戦闘機人か、それに、ゆりかごね、それを僕に言つてどうしろと？」

「はい、僕はユーノさんになのはさんのサポートを昔みたいにやっていただきたくて今日はきました。」

「昔みたいにね、でも、今のはなら一人で大丈夫だよ。」

「一人でも大丈夫なのは事実です。でも、何でも、一人で抱え込ませるよりも、やっぱり誰かが助けるべきでしょう。」

「だつたら君が助けてもいいでしょう？」

「ダメです。なのははユーノさんが助けるべきです。いや、助けなければいけません。」

「なんで、君は僕にこだわる。オーバーオーランクのなのははアランクの僕の助けは要らないよ。」

「確かに、ユーノさんは、攻撃では助けにならなことじゅう。でも、ユーノさんの結界はすごいです。防御魔法も、デバイスなしであれだけの強度はすごいです。」 だつて、僕の砲撃でびくともしないもん。

「でも・・・・」

「今すぐとは言こません。でも、考えておいてください。それに

「それに?」

「なのはさんに振り向いて欲しかつたら、久しぶりに男らしさとこ見せなこと。」

「結局そこー?」 なんて会話をしながら、仕事は終わった。

「今日はありがと。助かったよ。」

「いえいえ、今日こつたこと、考えておいてくださいね

「うふ、考えてみるよ」とユーノさんは微笑んだ。

「それじゃあ、ぼくは六課に戻りますんで。」

「うん、またね」と僕はユーのさんとわかれた。ちなみに、この後ユーノさんは久しぶりの睡眠を手に入れたのはまた別の話。

帰つたら、ちようび、フォワードたちが任務から帰つてきたといつた。へえ、今日がファーストアラートか。

「よひ、おつかれさん」とぼくはフォワードたちに声をかけた。

「はい！」とみんな元気に答えてくれた。すると

「ウィルズ君？ 何処行つてたのかな？」目が笑つてないっす、なのはさん。

「ちょっと、ユーノさんの手伝いをね。」

「ユーノ君？」ホツ、なのはの殺氣が消えた。これも、ユーノさんパワー

「うん、最近仕事が多すぎて寝てなかつたんだって、だから、手伝つてきたんだよ。」

「そりなんだ、なら、仕方ないね」となのはが言つた。よかつた殺されない

「今なんかよくない」と考へてた？』

「ナンノコトナシヨウカ」女って何でこんなに感がいいの？

「まあ、フォワード人もがんばったんだろう？だつたらいいじゃないか」

「うん、まあよかつたはよかつたなんだけじね、新型のガジェットが出たり、いろいろあつたんだよ」となのはが口を尖らせた。知るかそんなこと。

「ああ～疲れたからもう寝るは、後、FW陣ちゃんと休ませてやれよ、じゃあな」

「わかつてゐるよー」後ひでなんか言つてゐるナビ氣にしない。

（由来）

もつフアーストアラートか、早いな。

つてことは、もう少しで魔王が……やべえ回避してえ。
なんか眠い……もう寝よ。

じゅうと急用（後書き）

はい、ユーノ参戦決定！

いつごろかはまだ正確には決めてませんが、参戦させます。

だって、どんどん扱いがひどくなつてかわいそつだから・・・。

魔王陛下なりか。。。 (前書き)

ティアの暴走となのはさくチ切れシーンを書いたと思します。

魔王阻止ならず……。

なんやかんやで、ホテル・アグスタ……。やばい魔王回避のためいろいろやつたが無理っぽい……。

「ごめんティアナ……。

さて、気を取り直していこう。今から、ホテル・アグスタで行われるオーラクションの警備が任務だ。

「はあ、」

「どうしたの？」となのはが心配そうに聞いてくる。あんたのせいでよとは口が裂けてもいえない。
だって殺されるかもしれないじゃん？

「いや、最近新人たちの成長がすごいくて……。追い越されそう。そう、これは事実。正直ちょっとやばい。個人個人ではまだまだだが、4人になるといきなり強くなるからビックリだ。

「そうだよね、スバルたち最近ほんとに強くなってるよね。」ちなみに、今はオーラクション会場内。

FWたちは、外の警備だ。もう少ししたら、哥ーの君登場かな？そして、ルーテシアとガリューもか。

ヴィータたちも見回り。

フェイントさんも近くにいるし、はやてさんは、今頃アコース査察官

とおしゃべりかな?とゴーノ君登場。

そろそろか、

「僕は外の見回りにこつこつとくるよ。」

「え?あ、うん」

「さて、ティアとスバルは何処だっけ?」

ドガンドガン!?!お?あつちのほうから爆発が。ああ、ザフイーラか、がんばってるね。

てことは、そろそろマジでミスショットが近い。

↓ side FW陣へ

エリオ「召喚魔方陣?」

スバル「こんなこともできるんだ。」

キヤロ「優れた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるのです。」

ティア「なんでもいいわ、迎撃いくわよー。」

ス・エ・キヤ「おつー!」

ティア「今までと同じだ、証明すればいい、自分の能力と勇気を証明して、私はそれでいつだってやつてきた。」ティアの足元にオレンジ色の魔方陣が広がる。

シャマル「防衛ラインも少し持ちこたえててね。」

スバル「はい」

シャマル「ヴィータ副隊長がすぐ戻ってくるから。」

ティア「守つてばっかじや行き詰ります。ちゃんと全機落します。」

シャマル「ティアナ大丈夫？無茶しないで！」

ティア「大丈夫です。毎日練習してきてるんですから。エリオ！センターに下がって、あたしとスバルの2トップで行く！」

エリオ「はい」

ティア「スバル！クロスシフトAいくわよ！」

スバル「おうー！」

ティア「証明するんだ・・・！特別な才能や、すごい魔力がなくたつて！一流の隊長たちの部隊でだって、どんな危険な戦いだって！あたしは、ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ちぬけるんだって！」

シャマル「ティアナ、4発ロードなんて無茶だよ。それじゃ、ティ

アナもクロスミリージュも

ティア「撃てます」

クロス「ye s!」

ティア「クロスファイヤー……ショート………つあああ……！」

スバル「うあ！？（あ、当たる……）」とスバルは目をつぶった。そのとき！

ドカン！

スバル「ヴィータ副隊長！それに、ウイルズさん！」

ヴィータ「ティアナ！こんバカ！！！無茶やつた上に見方撃つてどうすんだ！！！」

「わうだな、無茶やつて」れじやあ世話をないな……。」

スバル「ヴィータ副隊長、今のはその、コンビネーションの一種で・・。」

ヴィータ「ふやけひたこー直撃コースだよー今の・・！」

スバル「違つんです。今のは私がいけないです！」

「もういいー後は俺たち一人でやるーお前らはちよつと頭冷やしてーーー！」

ティア「あ、ああ・・・あ」呆然としている。そりやそりだらうな・・・。

スバル「ティアいこ」

「side FA陣out」

「ヴィータ、厄介なことになつたな。」

「そりだな、でも、まずはいこ」の後かたづけをしねえと。」

「そりだな

それから、数時間後・・・。

なのは「えつと、報告は以上かな。現場検証は調査班がやつてくれるけど、みんなも協力してあげてね、しばらくして何もないようなら撤退だから。」

ス・エ・キヤ「はいーーー！」

なのは「で、ティアナはちょっと私とお散歩しようか？」

ティアナ「はい・・・。」

なのは「失敗しちゃつたみたいだね。」

ティア「すいません、一発・・・反れちゃって。」

なのは「私は現場にいなかつたし、ヴィータ副隊長とウイルズ君にしかられて、もつちやんと反省してると思うから。改めてしかつたりはしないけど・・・、ティアナは時々少し一生懸命すぎるんだよね。それでちょっと、やんちゃしちゃうんだ。でもね、ティアナは一人で戦つてるんじゃないんだよ。集団戦での私やティアナのポジションは、前後左右すべてが見方なんだから。その意味と今回のミスの理由をちゃんと考えて、同じことを一度と繰り返さないって、約束できる?」

ティアナ「はい。」

なのは「なら、私からはそれだけ、約束したからね。」そう、これで終わっていたと思っていた。少なくともなのははこれで今回の問題は解決したと思つていた。でも、問題は解決していなかつた・・・。

数日後・・・。

ティアナは毎朝早くから、自主練をはじめ、正式な訓練の後、日が暮れるまで自主練をしていた。

「おい、そんなにやって、大丈夫か?」

「大丈夫です、これだけやらないとまくならないんです。私、凡人なもんで!」

「凡人が、少なくとも、今のティアナは凡人じゃないと思うぜ?僕なんてさ、まあいいや、自分の過去語つたって、しかたねえもんな、でも、ちゃんと、なのはさんと話とくんだけ、お互い理解のうえで

なら、俺は応援するけどな。」「

「あつがとつじます。近い方に話してみます。」ついで、そっぽに向いたままかよ。」「いや、なのはにもうとかねえと……。

「なのは、いまいいか?」

「うふ、なにかな?」「

「いや、ティアナのことなんだけどよ、どうやら、ヒロード部隊の中で自分を凡人だと思ってるみたいなんだわ。」「

「そんなことないよ。」

「いや、そりゃわかってるし、つか僕に怒るな。だから、一度話してみりやどうだ?その、無茶の結果とかさ。近い方に話してやれば?あいつ、結構頑固だからさ。」「

「うふ、やうしてみるよ。・・。」「

「じゃ、頼んだぜ!」

それから数日後、一人はまったく話した気配もなく、模擬戦を迎えた。

「やべえな、ココヤ俺のミスだな。」「

「そうですね、このへたれ!」「

「ひでえ、自分のマスターにまつづる、自覚はあるよ、もう少し

ちやんとしてやりや、もつとつまくいったはずだ。だから、この問題は、俺が介入する。」

「おお、マスターが久々に俺といった！ こうなつたら本氣でいいですね？」マスター」

「ああ」 そうこうと、俺とトリシューラは模擬戦の会場に行つた。行くところうど、スバルが突撃し、ティアナがなのはに刃物を向けて飛んでいるところだった。

なんか、タイミングよすぎだね。 われながら怖いわ。（2発目で介入いいな！）（はい、マスター。）

なのは「レイジングハートモードリリース……」はじまる……。

レイ「a11 rie aogat」

なのは「おかしいな、二人とも、どうしたかったのかな？」

スバル「あつ」

ティア「えつ？」

なのは「がんばってるのは分かるんだけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ・・・練習のときだけ言うこと聞いて、本番でこいつ危険な無茶するなら、練習の意味ないじゃない・・・。」

ティアがハツと息を呑む。

なのは「さあとどか、練習じゅつけりよ。ねえ、私のやつじる」と、私のやつてる訓練、そんなに間違つてゐる……？」

ティア「くつ！私はーもつ誰も傷つけたくないからー楽したくないから！」

スバル「ティア……」

ティア「だから・・・！強くなりたいんです……！」と泣き声がうつに、懇願するようになつた。

なのは「少し、頭冷やそつか・・・。」

スバルはあつと息を呑む。

なのは「クロスファイヤー……。」

ティア「うああああー！…ファンタムブレ」「シユート……。」はつー

ドカン！…と爆煙が広がる。

スバル「ティア！はつ！バインド」

なのは「じつとしてよく見てなさい……。」やつぱつやる氣かよ・・・！

スバル「なのはさん！……」

なのは「模擬戦は」ここまで今日は「ひとつ待つた…」え？

その後、クロスファイヤーがそのままなのはにかえってきた。

「へー…」となのはラウンドシールドで防ぐ。

「フエイト」あれば「

ヴィータ」「あいつ、いつの間に

なのは」なにするのかな、ウィルズ君

「そりゃこいつちのせりふだ！なにやつてんだよ！一発目はいいとしてだ！」発射入らないだろ！おまえは、何処の何様のつもりだ！！！」

なのは「ウィルズ君、言つていことと悪いことがあるよ。ウィルズ君も頭冷やそうか……！」

「オイウィルス！行くぞ！」「しゃあねえな……。あの女に見せ付けてやろうぜ！本物の力つてやつを！…」「ベクトル操作スイッチオン！…来い！なのは！今からお前を倒す！」

「いいよ、やれるモンならやつてみるとこよ。デイバイインバスターナー…」「はやい！

だけど、これなら…・・・ドカン！…」「言つた割には楽だったよね

ウィルズ君？」

「楽だねえこりゃ、銀球でつぱうより痛くねエや！」「傷が回復する。

「...」

「アクセルシューター……」「へつ！」ベクトルで方向を逆にする。

—ならこれは?

「リミットブレイク!」 ハクシードモードになつた。 オイオイまさか本気?

「エクセリオン……バスター！！！」

みんな「あつ！」当たったという前に声がした。

「それが本気か、なのは。じゃあ、これからは、いつのターンだね。」

「テニシターリー・ライツ」

「オーライ……。」槍は双剣へと変わった。

「どうやるつもりかな」

「まあ、見てなつて、一瞬だから・・・！」

「はああーー！」と僕はトリシユーラを構え一気になのはにちかずいた、そのとき何発も魔力弾が飛んできたが、すべてベクトル操作で反射した。

「ティアナだつてな!!!! 好きでああなつたわけじゃねえんだよ!!!! お前に分かるか? 魔導師なり立てから、エース、エースって言われてよ!!!!俺たちの気持ちがわかんのか?そりやお前もかな

り苦労してるよな。だけど君、お前は自分よりも弱い人の立場を分かつてるのか!!!! 口で言わねえとわかんないことだつてたくさんあるんだよ!!!! それを、教導だけで見せるのには限界だつてあるんだよ!!!! どうして話さなかつた、自分の過去を、無茶すると危ないつて何で言わなかつた!!!! その一言でいいだろ!!!! おい答えろよ!!!! 答えろよ————!!!!

「くはあ!?」なのはは懐に入られて、なすすべもなく、僕のゼロ距離の攻撃で終わるはずだつた。。。そう、はずだつた。。。

「エターナルウゥウウ!!!! スラアアアッシユ!!!!

ドカン!!!! と爆煙が辺りを包む。しかし相手に当たつた手ごたえはない。なぜだ? シールドは間に合わない。

フェイエト「なのは・・・。」と心配そうに呟く。

ヴィータ「あいつ、やりすぎだろ」といつた

新人たちはあまりの僕の豹変振りに、声が出ないらしい。。。だとしたら誰だ? まさか!?

「そこまでにしたらどうだい? ふたりとも

「ゆ、ユーノさん!」

「ユ、ユーノ君・・・?」 そう、ユーノさんがなのはをかばつたのだ、確かにあの人の防御魔法なら簡単には敗れない。

「二人とも少し落ち着こつよ。」

「でも、何でユーノ君が？」

「僕の話はいいから、ほら、君たち、隊舎へ戻ろう。」とユーノさんは新人たちに声をかけ、みんなと一緒に隊舎へ戻つていった。

俺、なんか出てきて損した？ そのようですねマスター。

その後、アラートがなり、ティアナは待機をはずされ、なのはとフエイトさんとヴィータがガジェットの新型の撃退に向かった。

そのときのやり取りは、また次回で書いつ。

魔王阻止なりやあ・・・。（後書き）

はい、魔王編終了ひとつと手前。

本当はもっと早く更新の予定が、なかなか、案がまとまらなくて、遅くなってしまいました。楽しみにしてた方、大変申し訳ありません。

次回は、なのはさんの過去についてです。

それでは次回へ take off

ぶつかり合った後（前書き）

ユーノ乱入から後のことを書きたいと思します。

ぶつかり合った後

今日は、あの後のことを話しあう。あの後とこうのは、なのはと僕が戦い、ユーノさんの乱入によって終結した戦いのことだ。

「それで、一人ともどりして戦つてたのかな？今日は新人たちの模擬戦のはずだつたでしょ？」「とユーノさんが聞いてきた。ちなみに今いる場所は、六課のロビーである。

「それは、ティアナが無茶して、それで、なのはが怒つて、魔法当てようとしたから、僕が乱入したんです。」と僕がいった。

「えつと、ティアナってあの、オレンジ色の髪をした子かな？」とユーノさんがいった。

「はい、」とスバルが言った。ちなみにこには、僕となのは、スバルそして、ユーノさんがいるというわけだ。

「ふうん、あの子が、それで、なのははどりして怒つたのかな？」
とこにこやかに聞く。

「それは、その、無茶はよくないから。」となのはが答えた。

「なのはが言いたい」とはよくわかるよ。でも、そのことをちやんと話した？

「うう・・・。」となのはが痛いところをつかれた顔をする。

「なのは、人はね、万能じゃないんだよ。だからね、私の背中を見

て感じなさいだけじゃダメなときもあるんだよ。時には口で話さないやいけないこともあるんだよ。それを僕たちはいろいろなことを通して学んだはずだね？」

「うそ……。もうだよね……。」となのはが落ち込んでいる。
そのとき

キューン、キューン、キューンヒュードート音が鳴り響いた。

「おっと、緊急事態みたいだね。」とコーノさん

「じめん、ちよつと行つてくる。」となのはと僕は集合場所にいった。

「じゅら、今回のガジュットは新型らしい。」ひるの戦力を測るつもりか。

そして、ヘリの離陸上にいく

「今回の出撃は、私とフロイト隊長、ヴィータ副隊長の3人、」

「みんなはロビーで出動待機ね。」とフロイト

「そつちの指揮はシグナムだ」とヴィータ

「あ、それからティアナ、ティアナ……出動待機からはずれとこ
うか」

「そのほうがいいな、そうしたけ

「今夜は、魔力も体調もベストじゃないだろ？」「いいこと聞かないやつは、使えないってことですか・・・？」ん？自分で言つて分からぬ？それ当たり前のことだよ「現場の支持や命令は聞いてます。教導だつてちゃんとサボらずやつてます。それ以外の場所の努力だつて教えられたとおりじゃないとダメなんですか？私は、なのはさんたちみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルもない。少しくらい無茶したつて、死ぬ氣でやらなきゃ強くなれないじゃないですか！」とそのとき

誰かが、ティアナを殴つた。

「オイ、シグナム」とヴィータがいつた。

「いや、私ではない。確かに私は殴るつと思つたが、私ではない」とシグナムが言つた。

だつたら誰だ？

「どうして・・・そんなことを言つんだい。」

「ユーノ君！？」とフュイトとなのはが驚いている。そうだろ？普段はこういうことをしない人だからこそだ。

「なのは、行つて。」

「でも、」

「いいから、いつかは引き受けねから。」

「うん、わかった。」そうこうと、なのはたちはヴァイスさんへ
りで現場に向かつて出発した。

「コーノさん、殴らなくても……。」と僕が言つとこいつになく厳
しい顔でコーノさんはいった。

「あの、さつきのティアの物言いとか、それを止められなかつた私
は確かにだめだと思います。だけど、自分なりに強くならうと努力
するのとか！きつい状況のときなんとかしようとすると、そんな
にいけないことなんでしょうか！自分なりの努力とかそういうのも
やつちやいけないんじょうか！」

「君たちは知らなぞ過ぎる！本当の戦い。本当の無茶。それを知ら
ないで無茶したら、きっと後悔する……。ウイルズ君！分かるで
しょう君なら、あの場に居合わせた君なら！どうして言わなかつた
！どうして……！そつ、この問題はなのはだけの責任じやなく、
僕の責任でもあるのだ。

「ティアナつていつたね。君は何も知らない。生まれてからミシード
にずっといた君たちは知らないかもしけないけど、なのはたちは好
きで魔導師になつたんじやない。」

「え？ それつて……どういづ。」とティアナが混乱している。

「シャーリー、なのはの過去のデータあるよな？」

「はい、ありますけど、いいんですか？」

「後で僕がちゃんと謝つとくよ。」とコーノさんが言つた。

それから、みんなでロビーに集まって

「これから、なのはたちの過去を見せるよ。これが・・・、僕やウイルズ君が生きてきた戦いなんだ・・・。」

「昔ね、一人の女の子がいたの。その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかつた。ただ、友達と一緒に学校に行つて、家族と仲良くして、普通にそういう生活を送るはずだった、だけビ、事件が起こつた」

「それは、僕が見つけたロストロギア、ジュエルシードが原因なんだ・・・。」

「魔法学校に通っていたわけじゃない、特別な能力もない、偶然魔法に出会つた、ただ魔力が多いたつた九歳の女の子が、魔法と出会つてわずか数ヶ月に命がけの実践を繰り返した。」

「これ、フュイトさん・・・?」とヒリオ

「この頃のフュイトさんにはいろいろな家庭の事情があつてね。なのはさんと対立してたの。」

「この事件の中心人物は、テスター・ロッサの母、プレシア・テスター・ロッサ。その名をとつて、プレシア事件。あるいは、ジュエルシード事件と呼ばれている。」

「集束砲？こんな大きな！」とエリオ

「九歳の女の子が。」とスバル

「ただでさえ、大魔力砲は体に負担がかかるのに。」とキャロ

「その後もな、あまりときもおかげ、戦いが続いた。」

「私たちが深くかかわった、闇の書事件。」とシグナムとシャマル
がいった。

「襲撃戦での撃墜未遂と・・・敗北。それに打ち勝つために選んだ
のが、当時まだ安全性がなかつたカートリッジシステム。体への負
担を無視して、自らの限界を超えた出力を引き出すフルドライブ。
エクセリオンモード。」

「誰かを助けるため、自分の思いを貫くための無茶を、なのはは続
けた」とユーノさんが悲しそうにいった。

「でも、そんなことを続けて、体が無事ですむわけがなかつた・・・
。事故が起きたのは、入局一年目の冬。異世界での操作任務の帰り、
ヴィータちゃんや部隊の仲間たちと出かけた場所。未確認の敵・・・
いつものなのはちゃんならみんなを守つて落とせたはずの敵、でも、
たまっていた疲労、続けてきた無茶への反動が、少しだけなのはち
ゃんを鈍らせたのね。その少しがなのはちゃんを落とした。」

「これってー？」とエリオが言つ。

「そう、ここで、なのはを助けたのが僕だ。この頃はまだ、なのは

たちと面識がなくてね。このとき初めて一緒に任務をしたんだけど、突然の事態で……」

「でも、これって！？」とスバルが驚いている。

「そう、これで、僕は瀕死の重傷を負った。だけど、僕にも、引けない理由があつてね、なのはのために、部隊のために、戦った。今はちよつと違うように見えるだろ？これが僕の本気の片鱗。僕の中にはもう一人の人格がいてね、そいつは、反射をつかさどっている。そして僕は思考。この二人が一緒になつたら……。つてぼくもまだちゃんと試してないんだけどね。」

「ウィルズ君のおかげで、なのはは助かつた。でも、その後がもつとつらいんだ」とコーノ君。

その後、リハビリの映像やら、僕たちの戦いやらを見て、新入たちは泣いていた。

自分たちは魔法に甘えていた。この世界が当たり前だと思っていた。だが、現実は違つた。

僕は異世界で経験している。戦闘機人との初戦闘を……。この映像はあまりにクロアいため、ところどころモザイクがかけられていた。このときの僕はちよつと理性を失つていたからね。

そんなこんなですべてが終わつて。

「私、なのはさんがあがへて、なのはも喜ぶから。」とコーノ君がいった。

「やうしてあげて、なのはも喜ぶから。」とコーノ君がいった。

「ヒカル、ユーノさん、司書長の仕事いいんですか？」

「ああ、別に大丈夫だよ、アルフたちががんばってるから。」

「あの～ヒカルでユーノさんって何をやつてる方なんですか？」とスバル

「えっと、一応無限書庫の司書長と考古学者をやつてます。」

「えええ！～！」と新人たち驚きすぎ。

「でも、あの魔法は。」

「ああ、ユーノさんの防御魔法はすごいからね、ユーノさん結界魔導師でもあるんだ。」

「アランクだけどね。」と謙遜してる。

「ティアナ、僕は別にすごい魔力があつたわけでもないし、レアスキルもなかつた、でも、守りたい人がいると、自然と強くなるからさ、そんなにあせらなくともいいんじゃないかな」とユーノさんが言った。

「はい」とティアナが答えた。

ぶつかり合った後（後書き）

今回はここまで、次回は、仲直り編。

それでは次回へ take off

仲直り編（前書き）

更新遅れてすいません。

それでは仲直り編始まります。

「はあ、なんか面白いです。」と僕が謝ると

「いいよ別に、僕も君に悪気がなかつた」とぐらり分かつてゐるから。

「

「そうこうしてくれると助かります」

「それよりすんません。なのは傷つけちゃって……。」

「別にいいよ、この件はなのはも悪いしね。」

その頃、なのはたちは原作どおり、ティアナと会話し、そのほかのメンバーが覗くということをやっていた。そして、それがティアナにばれて、追いかけられるところにつもりのバカ騒ぎを済ませて、今、コーカーとなのはは話していた。

「その、『めんなコーコー君。』

「いじよ、せつきウイルズ君にも謝られたしね。それで、この前ウイルズ君にいろいろ聞いたんだ」

「ウイルズ君から?」それからコーコーはいろいろ話した。六課が壊滅すること、地上本部が汚職をしていること、それから、なのはが苦しむ」と

「そつか・・・、私はまた戦うんだね、覚悟はあるんだよ。そのために六課にはいったんだから。」

「なのは」

「なに?」

「僕はいつ、何処にいても、なのはを守るよ」それだけ、と言つてユーノは仕事へと帰つていった。

sideなのは

「僕は、いつ、何処にいても、なのはを守るよ」それだけ、ヒューノ君は言つてしまつた。

「え・・・・・」はじめはなにを言われているのかわからなかつた。これつて告白?

この気持ちは何? わからなによ~。

sideなのは out

sideユーノ

「言つちやつたな」と呟いた。出会つてからずっと思つていた気持ち。あれは、告白に近い言葉だった。

「いまさらだけど恥ずかし・・・・・」と顔を赤くして自分があつた。そのとおり

「どうしたんすか? ユーノさん」とウイルズ君が前からやつてきた。

「ああその、」と今言つたことを話した

「やつたじやないですか。返事はどつあれ気持ひは云わつたと思ひますよ。」

「でも、なのは鈍感だから。」と苦笑いした

「おつと僕は無限図書に戾らないと、アルフが心配だ。」

「はい、お疲れ様でした。それと、ありがとうございます。」

「うん、いいよ、おかげで勇気が出せた。」

「それではまた」

「うん、またね」そつそつと僕たちは別々の道に進んだ。

side g一ノo ut

「はあ、つこに」ゴーーさんやつたんだな。」

「そうですね、へたれのあなたとは違います。天と地ほどの差です
「そこまで言つてないんじゃない!」

「まあ、これで二人は付き合つかもしれないんだよな。」

なんていいながら考へた。今まわりにそんな相手になつそつな人はいるか。

「こないよな」 わつ結論づける。

「とにかくコーヒーさんにはがんばって欲しいな」

隊舎に向かつてると、前からトライアナが来た。

「あの、今日はありがとうございました。」

「いや、別にこよ、僕も暴走しちゃったしね。」と苦笑い

「それでその・・・」

「なのはさんと仲直りできた?」

「はい、おかげまで、それでコーヒーさんせ

「はい、おかげまで、それでコーヒーさんせ」

「もう帰ったよ。同書長の仕事つて結構大変なんだよ。」

「やうなんですか、まだお礼言つてなかつたの?」

「トライアナは

申し訳なさそうにしてくる。

「えじや、僕は寝るね。おやすみ

「はい・・・おやすみなさい」 わつこうと、僕は隊舎に向かつていつた。

ちゅつと原作と変わってきたのが、こよね。

僕はまだこのとき知らなかつた、今この瞬間、どんなことが起つたとしていたことを

s i d e ? ? ?

「準備オツケー」

「それじゃあ、作戦開始！目標、機動六課

仲直り編（後書き）

今回は男らしいユーノ君&新しいストーリーへの予告？見たいなと
ころです。

早い内に次の更新はしたいと思います。

次回「潜入！機動六課」へ take off

潜入！機動六課（前書き）

はい、早くも新組織が登場です。

それでは、守る戦いはじまります

潜入！機動六課

ド「ゴン！――」といつもで僕は目覚めた。そして、目の前に広がつていた光景は地獄だった

六課の隊舎に攻撃している集団がある。なんだ？ナンバーズではない。それに、これは！！！

sideナンバーズ

「何だこれは、予定と違つぞ！」ヒトーレが言った。それもそのはず、自分が仕掛ける前に、六課の隊舎がもえているからである。

「いつたいなにが起つていてる」とヒトーレと他のナンバーズたちは呆然と立ちつくした。

sideナンバーズout

side六課

「何や、なにがおきとる。」とはやでが聞いた。

「はやでちゃん、なにが起きてるの？」となのはがきいてきた。

「わからん、私にもむづぱりや、スカリエッティでもない、別の何かや。」

その頃外では

「スバル、行くわよ！」

「おう！」と一人は戦っていた。

つたくなんなのよ」「いつら！なんかわかんないけど、あいつらも魔導師かしら

「ティア！！！」え？

私は振り向いたそこにはトランクのようなものが飛んできていた。

ああ、もうだめだ・・・と目をつぶった。しかし、痛みがない恐る恐る目を開けると

「はあ、なんとか間に合つたな。」とトランクを一難ぎで断つた男がいた。

「大丈夫かティアナ。」

「はい、はい、」とティアナは泣きそつた。よっぽど怖かったのだろう。

にしても、何でこいつらかね、だつてそつだろ？おかしいじゃないか。見方のはずだよ？

そう、六課を襲撃した敵は「管理局」（見た目はだ）だ

「なぜこんな」とをする。「そう聞いてみた。

「あの方のためだ。」とワードをかぶった男が答えた。

だが、おかしい、管理局の魔法にしてはちよつと違つ。だがそんなことにはまつてはいられない。

「お前には聞きたい」とは山ほどある。だから、お前を逮捕する。」

「ほひ、やつてみるがいい」

そして、僕と男の戦いは始まった。

男の名はフルネームは分からぬが、「クリス」らしい

仲間のやつがそう呼んでいた。

「行くぞトリシユーラー！」

「オッケー相棒！」ホントキャラ変わったよなお前と苦笑しながら男に向かつて突き進んだ。

「神……列！」僕は田にも留まらぬ速さで槍を振るつた、だが、

「おせいな」すでに男が後ろに回りこみ、

「天霸激震」としづかにいふと、僕に向かつて拳を叩き込んだ。

「くわおおおーーーー」といしながら、トリシユーラーを向け、プロテクションを張るが……それはあっさり碎けた

「な……に」と呟いたそして、僕は負けた……。トリシユーラーは先ほどの一撃で真っ二つに折れ。

僕自身も重傷を負つた。

「ふむ、IJの程度か。ならば続きをひみぐ。」 そういうと、男は六課に向かつていった

「ま・・・てよ」

「ウイルズさん？」 スバルが言つた。

「 もうやめてください、ウイルズさん……」 ティアナが叫ぶ

「 知つたこいつちやねえ……」 こつは俺たちの家を壊すんだろ。そんなんやつ許せるかよ！ なのじさんたちの夢の部隊を簡単に壊せるかよ……！ そうじやねえだろ……！ そんなことは俺がさせねえ、そうだろー！ ウィルス……！」 と自分の半身に呼びかけた

「ああそつだよな。あの男にそいつとやつてやらねえとな……！」

「まだやるが、ならば来い！」 男はそつこいつと拳を構えた。IJのじて、第一ラウンドがスタートした。

sideのは

「はあ・・はあ・・はあ」 後一四。半なかの期に乗じてガジェットが来るとは思わなかつた。

私ははやしづちゃんと別れた後、隊舎を守るために敵を落としていた。

「あらりー！ なんど！」 で本命と会えるとは私も運がいいのかな~」

「あなたは何者ですか？」と殺氣を出しながら聞いた

「おお怖い怖い、私殺氣だけで死んじゃう。まあ、おふざけはここまでにして、今からあなたを倒すわ」

「なぜ？」

「それは・・・あなたが計画に邪魔だからよー」と一気に間合いをつめてきた。

うつと息を呑む

まずい・・・。

「レイジングハート、エクシードモードスタンバイ」

〈オーライ〉

「エクセリオーンバスター！！！」

「おつと～」なんていいながら相手はかわす。

「あなたたちは何者？なぜそんなことをするの？」

「いずれ分かるわ。でも、六課のようなエースの固まりは邪魔なの、だから、死んで頂戴！」

「くつ！ レイジングハート」

「プリテクション」

「今よ!」え?まさか、もう一人

「これあなたはおしまい。」と前の女は笑っていた。

その直後後ろから気配がした。だが間に合わない

誰か、助けて……。

その瞬間私たちの足元に魔方陣が広がった

「遅くなつたねごめん。」そこには、片手で相手の攻撃をシールドしている、ゴーノ君の姿があった。

「くつーば、バインド」前の女はいつの間にかバインドをかけられていた。

「くつそ、捕まるわけには……」そのとき、何かが落ちてきたそして

「煙幕!?」周りが黒い煙に包まれた。

「大丈夫?なのは」

「うん、ありがとう。敵は?」

「じめん、逃げられたよ」

「その、約束守ってくれて……そのありがとう……//」

と私は顔を赤くしながら言った。

「うん、僕も守れてよかつたよ。」

sideなのはout

男と僕の戦には拮抗していた、

「なかなかやるようだな。しかし、やつこいつとこきなり後ろから拳が降ってきた。

「ふん、当たるかよ」といながらかわす。

「せつめい動きが違う。なぜだ！？」と男は驚いてくる。

「反射と思考の融合！・・・それが、僕達の（俺達の）あるべき姿だ！」

そつこいつと一緒に距離をつめ勝負をかける

「エターナルスラアアッシュ！－！」だが、

「うわああ」と飛ばされたのは僕だった。

「お前・・・・」

「クリス、今はこいつらの歩が悪い。またいつか出直そう」やつこいつと、クリスの仲間らしき男が栗栖と一緒にどこかへ転移した。

「おー、待て！」

「くそー。トロシゴーラ。トロシゴーラ。」

「へたれよつ先にへたばつてしまいそうですね。」

「いみんな、俺の代わりに」

「いえいえ、マスターを守るのが私の仕事です。」

「今はゆつべり休め。また直してやる」

「はー、マイマスター。」

「うごうど、トロシゴーラはスリープモードに入った

「あー、あこつを追うか。」

「ちよとまつてえー」

「お前ー。セイ়ンか?」

「やうだよー。今日はほんとほりを攻めるはずがもう攻められちゃつて、それで、管理局に潜入してる仲間から、いろいろ連絡があつて。これから、私達と一緒に来てくれないかな」

「信用していいのか?」

「向こうに行けばわかるけど、私達は今争っている場合ぢゃないんだよ」

「分かつたついていく

「ちょっと、いいんですか？」

「今は俺のほうが立場が上だ！けが人を集めてセインに続け」

「は、はい」そういうとスバルとティアナはけが人に応急処置をして僕のところへ来た。

「待たせたな」

「それじゃあ、出発～！」

sideフHイト、はやて

「なつ！」今私達はありえない人物と遭遇している。

「ジエイルスカリエツティ」

潜入！機動六課（後書き）

はい、今日は二〇〇九までです。

なぞの組織。

まだどのくらいの規模にしようとかは考へていませんが一応登場させました。

その組織でいろいろとオリキャラを出したいと思つて、皆さんがひ、自分が考えたオリキャラを教えてください。

それでは次回へ take off

おわか、おわかの共同戦線（前編）

えいむです。自分の文才のなれに日々落胆しながら今日もがんばって書きたいと思います。

まわか、まさかの共同戦線

s.i.d.eはやて&フロイト

私たちはデバイスを構えた。

「スカリエッティ、あなたを逮捕し「ちょっと待つてくれたまえ。」
え？」

「私はつかまるために来たわけでもないし、ましては戦うためにきたのではない。」

「うそいえ、これをやったんはあんたや！」とはやでが言った。

「オイオイ、私はこれに関しては何もしていないよ。今日夜襲をかけるはずだったのだがね、何者かに先を越されたみたいだ。そのとき、私の部下が探ってきた管理局のデータにこんなものがあった」
そうじうと、スカリエッティは手に持っていた紙をこちらに投げてきた。

「う・・・やや」

「そんな・・・」

そこにはこう書かれていた。

「これより、地上は海へと宣戦布告する。これに邪魔な、六課の面々と共に今まで利用していたスカリエッティの全滅。これを足がかりに、プロジェクトSを始動させる」

「私も、君たちも用済みといつわせ」

「だから、エリスンヒー。私は強く言った。

「いやいや、金の閃光は怖いね。ひとつの提案だが、私たちと手を組まないかね」

「誰が、犯罪者と手なんか」「フロイドさん」「ウイルズ君？」

「言いたいことはわかります。でも、今はスカリーハッティにしたがって彼のアジトまで同行してきてください。今の六課じやけが人も手当できませんし、それに・・・」

「それ」

「いえ、何でもありません、とにかく、同行してきてください。お願いします」確かに敵の味とに行くのは気が引けるが、今の六課の状況を考えると、でも・・・

「わかった、つべてく

「え？ はやで」

「今は、彼らの気持ちだけの問題じゃない、彼らの部下のこともあらんや」

「そうだね、わかった。私たちも同行します。」

「聞き分けがよくてよかつたよ」とスカリーハッティは心底ホッとし

た様子だった。

「それでは、ついてきてくれたまえ」

sideフライト&はやとout

sideなのは

私はなんとか生きていた。コーノ君に守つてもういながらだけど。

ガサツ

「誰！」

「すまない。驚かせてしまったようだ。私はチング。これから私と共にドクターのところへ来ていただけるか？」

「え？」

「なぜ君たちについていかなければならぬ。」とコーノ君が言った

「すまない。今はなせるような事情ではないのだ。仲間の情報だと、後は、君たちだけだそうだ。」

「わかった。ついてくよ。」

「ユーノ君！？」

「君たちは戦闘機人だろ？的だった僕たちをアジトに招待するくらいの状況ならついていくしかない。」

「でも、」

「いいから、僕を信じて、ね?」のは

「うと」

「話はまとまったか、なぜ貴様が私たちを知っているのか知らないが、ついてこい」

「いくよなのは

「うん。」

sideなのはout

「はあ、」

「どしたの? 溜め息なんてついちゃつてた。」とセイインが聞いてきた。

「いや、クリスとかいう男と戦つてな、そんとき俺の相棒ぶつ壊しちやつたんだよ」と苦笑氣味に言しながら、ボロボロのトロシユーラを見せる。

「あちやー！」までボロボロだと修理に時間がかかるね。」

「あの、ウイルズさんはこの人とお知り合いですか?」とティアナが聞いてくる。

「ああ、六課にきたばかりの日に、そう、ティアナとスバルを倒した後に戦つた。」

「え？あの後に戦つたんですか？」

「ああ、あんときはあまり力使わなかつたな、邪魔も入つたし。」

「ううう～あのときのことは思い出したくな～・・・／＼／＼セイঁが顔を真っ赤にしていた

「どうした？」

「なんでもない……」

「とにかく遠くスカリエッティのところに行かなきゃな。それと、さつきはごめんな、二人とも」

「え？」と一人とも固まる

「いえいえ、別にいいですよ」とスバル

「別に気にしてませんから」とティアナ

「そうかならよかつたよ」と僕は微笑んだ

「・・・／＼／＼」となぜか一人とも顔を赤くしていた

「・・・／＼／＼（あの笑顔は反則だよ・よ）」

スバルとティアナがそう考へてゐるときに僕は

早く次のデバイス作らないとなと思つていた。どうしよう、今度は遠近両用にするべきか、あのクリストか言つ男、手のわい

「そろそろ着くよ～」とセインの声で我に返り

「ああそつか、ありがとな道案内」

「いや～別に、私も帰る予定だつたから。」

アジトについてみると、みんなそろつていた。怪我をした人は手当を受けていて、六課の隊長たちはスカリエッティと話している。

「おっ、ようやく来たようだね。それでは、今から重大なことを言う。六課の諸君も聞き逃さぬように」とスカリエッティが言った。

「リリーリーの全員が、管理局から追われる身となつた。なぜかはまだ不明だが、ミッド地上本部は、どうやら、時空管理局と戦争を起こす期だ。」そうこうと

「戦争だと」とか、「なんど」とかいろいろなことが聞こえてきた

「みんな、静かにして」となのほが言った

「私は、今から海にこのことを伝えなあかん。それに、この件には、なぞの集団がかかわつてゐらし。その件については後にして、この事態を開けるために私機動六課は、本日を持って、ジョイ・ルスカリエッティと手を組もうと思つ。みんなどう思ひへ？」とはじめてが言つと

「そいつは犯罪者だ」とか「信用できない」「地上とたたくなんて無茶だ」とか聞こえる

「そこでや、いやな人は今から申し出してくれれば別にこのままつこて込んでもいい。その代わり、地上から自分のみを守るすべがないがそれでもええか?」

そう言われ、みんなが暗い顔をする。そりゃそうだろ?今まで信じていた管理局から裏切られて、正直みんな混乱しているはずだ、

「みんなの気持ちはよくわかる。だが、この事件は、みんなが思っているほどやさしいものではない。僕が今日戦った敵は、推定でもオーバーランク、それにはまだ仲間もいるはずだ。そういうのは、ユーノさん」

「うん、私のところに一人、ユーノ君がいなかつたら私たぶん死んでたかも」

その言葉にみんな驚いている。なんせ、管理局のヒースが死にそうになる相手がいて、その数は未知数。

「みんなにはよう考へて欲しい。一日待つから、協力してもええ、ついていくつていう人は、明日また話し合うときに言ってな。」ほんなら解散とはやてが言つと、みんなが回りの人たちと話し始めた。

「その、なんかごめんな

「何で、謝るのかな」

「いや、なんとなくだ」もしかしたら、僕がユーノさんに原作のこ

とを言ったから未来が変わったのかも、パラドックスの「ことをもつと考えるべきだった。と一人悔やんでもいるとい、隣から

「お前がなにを一人で悔やんでいるのかはわからんねえ、でも、やつちまつたことはじょうがねえじやねえか」と話かけてきたのはヴィー・タだつた。

「あたしも、守護騎士のときこうんな過ちを犯した。でも、いくら悔やんでも、やり直せるわけねえからな。だから、あたしは前を向いて歩んでこくじにしたんだ」

「せうか、なんか、ありがとうな。」と笑しながら微笑んだ

「べ、べつにお前のためじゃなくてだな……」と顔を赤くしていった。

「でも、ありがとう

「お、おひ・・・／＼／＼

ヴィー・タと話して何かが吹っ切れた気がした。過去をくじがつてしまふがない。

今日は寝るか。せうして意識が途切れた。

～次の日～

「みんな、昨日の答えを聞こつか」「これから、始まる気がした

まわか、まさかの共同戦線（後書き）

オリジナルって難しいですね。でも、がんばって書きたいと思います。

敵味方問わず、オリキャラ募集中です。よろしくお願いします。

それでは次回へ take off

新たなスタート（前書き）

今回は短いです。

超絶的に短いです。

新たなスタート

「みんな、昨日の答えを聞いたりつか」とはやでが言った。

周りからは、「オッケーです」とか「ここまできたらいいぜ」とか、「まあ、満場一致でスカリエッティと手を組むことになった」。

「そうか、ほんならまず、みんなに休暇や」

うんうん休暇は大切だよな・・・ってオイ！

「休暇？」と僕が聞いた

「せいや、現状、戦闘は無理や、そいやあへあなたやつてデバイス
なしはきつこや」

「まあ、そりやそりだけど。」

「わいこい」とええな

「うんこいよ。」ヒナのは

「私も賛成かな」とフロイト

「僕もいじよ、スカリエッティたちともこいこい話したいしね」と
ゴー

「わかった。僕も賛成。その間新しいデバイスを考えとくよ。」と
いいながら僕は静かに手の中にある残骸を見た。

「ほんならみんな、解散や」とはやてが笑顔で言つとみんな散りぢりに解散した。

それから僕は、機械に強そうな人を集めた。

一人はシャーリー

もう一人はクアットロ

「そんでもうしたいわけよ」

「うへんできないこともないわねえ」とクアットロ

「やうですね、できないこともないと思いますが」とシャーリー

「それじゃ、頼むよ」

「これからどうするんですか?」

「うん? ちょっとね、新しい技の練習をね」

「新しい技? なにそれ~気になるう~」とクアットロ

「あまり使いたくはなかつたんだけどね、これは人を殺す技だから。だから、できれば使いたくないよ」と苦笑氣味に言つた。

「やうなんですか、でもどうしてその技を?」

「うん、クリスが、あいつが放つ殺気が本気で、いつものご様といづときのために用意しとかないとねって思つてね」

「やうですか、まだ病み上がりなんでもじもじしてくださーね」とシャーリーに言われた

「やうですよ、ドクターは常づね六課のイレギュラーはウイルズだつて言つてましたし、体は大事にしてくださいね」とクラットロに念を押された

「ああ、氣をつけるよ」

それから何日か過ぎた。

新しい技もできてきたし、後はテバイスかな。

今回テバイスは2つ注文した。

ひとつは、長距離から敵を狙い撃つ銃のようなもの

もうひとつは、日本刀のような形をしたやつ。モデルは刀語に出でくる完成形変体刀「絶刀・鉋」なぜこれをチョイスしたかと云ふと、一番作りやすかつたらしく、誰かつて?メカ好きめがねの二人が

といづわけで今日がその完成日つてわけよ。

「おーい、できたか?」

「できましたよーん」とクラットロが銃のほうを持ってきた。

「はいどいつも」とシャーリーが鉗を持ってきた

「二人とも」「めんな、一いつも注文して、これのお返しは、事件が解決してから必ずするから。」と一人に言った。

二人は別にいいといったのだが、これでは気がすまないので、好きなことをしてあげる約束で丸く収まった。

「さて、セットアップするか、鉗、トリシュー・ラライト、セートアップ」「そういうと、僕はバリアジャケットに包まれた。

今のバリアジャケットは、昔のような洋風のものではなく打って変わつて、和風だ

まあ、鑣七花が着ていた羽織と思つてくれればいい。トリシュー・ライトの場合は、前と同じにするつもりだ。

「うん、いい感じだね」

これから、戦いが厳しくなるかも知れないけど、僕はこの一いつ愛機でこの戦いを生き抜こう。そう誓い僕は一人、たたずんだ。

新たなスタート（後書き）

皆さん更新遅れてすいません。

なんかグダグだになりました。

近いうち更新するつもりなのでよろしくお願いします。

新機動六課の休日（前書き）

今回は、原作のH.P.ソードに乗つ取つて書いたこと感ります。

セリフは勝手に改造しますが・・・。

新機動六課の休日

さて、鮑や復活したトリシューラの練習をしながら数日が過ぎた。その間にも、何回か襲撃があった。

まあ、襲撃といっても雑魚ばっかで被害はそんなにひどくない。

そんなこんなで、今日は、我らが新機動六課率いる頭脳派めがね二人組みが、「今日の襲撃は絶対ありえません!」と口をそろえていつたので、はやてとスカリエッティなど主要人が休暇をOKしたのだった。

「スカリエッティ」

「なんだね?」

「今日の「ひび」、ドゥーハをひびちに戻してきたらどうだ?」

「うーん、まだいいかな、ドゥーハにはもうちょっと仕事をしてもらひ必要があるから。」

「やつか。まあ、お前も休暇を楽しめよ」

「ああやつをせてもらひよ」とスカリエッティと他愛もない会話をして、僕は自室に向かった。

そう、ここ最近でスカリエッティのアジトはかなり改造された。今までのように、隠したりはせず、堂々と六課のような建物を建造した。これは、明らかな敵対を意味する。聖王教会や海とも協力して、地上を占拠したなぞの組織に対しても戦うか、意見を出し合って

いるのだ。

まあ、そんなわけで、みんなにもちゃんとした部屋があるわけだ。
昔の地面の中みたいなところでは、さすがにつらくなつてきたのだ。
誰がつて？主に男子が、それはなぜか

それはズバリ！

毎日美女たちと一緒に広いところで雑魚寝は精神的にようしくない。
なんだかんだいって、今部隊はナンバーズ含めて、美女が多い。まあ、そんな話はおいといて、僕はこの休日で、新たなものを開発しようとしている。それは・・・、一時的にその能力がつけるカード型デバイス。まあ、意思のないユニークンデバイスとでも思つて欲しい

その名も！セラヴィー、アリオス、ダブルオー、ケルティムの4つ。
ぶつちやけ、前世の記憶にある、
〇〇の機体をパクつただけの4枚。さて、作り始めるか

それから、丸一日・・・。

「ようやく完成。」

ふう、これからテストを・・・

ヴィーン ヴィーン

アラート音？

「ライトニング3・4子供を発見したみたいですね。」

子供？ヴィヴィオのことか

つて」とは・・・はずー！

「おい、今から俺が向かう。FW陣は合流して、そのまま待機してる」

「あの、どうしたんですか？」トルキノ

「いやな予感がするんだ」実際には予感じゃなくて、確定したことだ。襲われる。

ヘリを飛ばすなどいおうとしたがもう遅く、なのはやフェイト、はやてたちも現場に向かっていた。

「みんな待つてろ」俺はそつ然と飛び去った

sideなのは

「なにこれ」

「動かないでなのは」ユーノ君が結界魔法を発動した。

「ほう、これは大した魔法だ。」

「誰だ！」

「またあつたわね～」と現れたのは

「六課襲撃の」

「そうよ、あの時は邪魔が入ったから、ここで決着をつけさせてもらひつわ。公平に一対一で行きましょう」

「なのは!?」ユーノ君の声が聞こえた

気づいたら私はもう一人にかなり遠くまで飛ばされていた。

「…………」もう人はあまりしゃべらないらしい

（なのは、なのは）ユーノ君から念話が来た

（大丈夫だよ。こつちは私がやるから）

（わかつた。こつちは僕がやるよ）

（でも、ユーノ君攻撃魔法が）

（大丈夫。僕信じて）

「あなたの名前は」私は聞いた

「…………ウラヌス」

「そう、はじめから全力で行くよ!」

「…………」いつして、私とウラヌスさんの戦いは幕を開けた

s.i.d.eなのはout

「みんな集まつた？」

エ・キヤ・ス「はい・はい・おひ」

「さあ、ウイルズさんが来るまで待機つて言われたナゾ。エリオ
しょつかしら」 そういつた直後

ドゴン！――とこづ爆発音と共に

「その子をいただこひ。」

「誰

「我名はヤハウ・アインソート。その子をいただこひ。」

「はいそうですかつてわたすわけないでしょ」

「やめておけ、貴様らの実力では我にはかなわぬ。そつだな、あの
クリスに傷を負わせた男ならいこことこだらう。」

「私たちじゅ、相手にならなこつて、ならまくはその口をふさ
がせておひわ」

「エリオは速さを生かして背後を突いて、スバルは囮、キャロ
はみんなにブーストいいわね」

（はい・はい・おひ――）

ティ「行くわよ！」

「ふん、くるか」

ティ「クロスファイヤー！！！」

キャラクターライブ「みんなにブースト」

OK <
OK >

「僕は隙をつく役だ、今はじつと耐えるんだ」

ス「つおりやああーーー！」

ふむ、なかなかのものだなしかし、

あいつはなかなかの物といつた、その直後

「集うは雷。行つは鎌?ぎ」あいつはもういつた、ただ言つただけなのに、直後

「ああ、それも」

エ「うあああ」

ナニヤ「アキラ」

ス「うあああ」

みんな雷を帯びた鎧で縛られた

ティ「何よ」
「れ」

「！」の程度ではつまらんな。だが、戦士じつへ散らせてやる」

「集つは無数の刃、行つは花びらの舞」

なによ、じんなとこりで終わり？そんな

「飛竜……一閃！」あきらめたときじんな声が聞こえた

「ティアナよ何をあきらめている。そつ簡単にあきらめは向もで
きないぞ」

FW「シグナムさん」と涙を浮かべた

side FW陣out

sideシグナム

「私の部下が世話になつたな」

「六課はここまで戦力を持つていては、やはり恐ろしい。」ヒ
ードの男が言つ

「レヴァンティン、カートリッジローデー！」

ガチャン、ガチャンといふ意味のいい音が聞こえる。

「ふむ、貴様なら相手が多少務まりそうだな。プリズムカリバーズ
々にやれそうだ」

「そうですか、全力で相手をさせていただきます^

「ふむ、ならば行くぞ…騎士よ」

「はあああ！…！」

ガキン！ガキン！と何度も打ち合つた

「貴様なかなか」

「お前」いや、なぜだか楽しい

「我と同じ性格のやつがいるとは」

「どうこいつ」とだ？

「貴様も戦闘狂だろ？」

「ふん、お前もか、ならばじばらく打ち合つとするか

「望むところ」といいながら、じばらく打ち合つていたが、そのとき

「ぶち抜けえええ！…！」

〈ラケーーンフォーム〉

「む？邪魔か！集うは光、行うは障壁」

「おまえ、何もんだ！」ヴィータであるといひだつたのに
こいつの間にやがら、FW陣も復活していた。

「ぐり・・・六対一か、さすがに、歩が悪いか」

「逃げるのか！」

「貴様！名はなんと申す？」

「シグナムだ、貴様は？」

「ヤハウ＝・アインソートだ。この決着はまた」といつて帰つてい
つたがまた戻つてきて

「言い忘れた。お前らの戦力のエンゲル係数高すぎだ。何れ力の重
圧に耐え切れなくなつて瓦解するぞ！」

そういうと、ヤハウは帰つていった。今度こそ。なんだつたんだ？

sideシグナムout

side???

「狙いはどつだ？」

「問題ないよ」

一人の人影がビルの屋上からへりを狙っていた。

「ネプチューに頼んで、挑発してもらつか」

「そだね～」

s.i.d.e.??.? out

s.i.d.e.ヴィータ

「逃がしちまつたな」

「そうですね、申し訳ありませんでした」とティアナ

「やうだな、もうけよつと冷静にな」といつておいた

? 「そこの人たち？ ようじいかしり」

「誰だ！」

? 「攻撃したつて無駄よ？ 今しゃべつてるのは、幻影だから

? 「一休みもいいけど、お仲間は大丈夫にや〜ん？」

「何だと…？」

「高魔力反応！ 推定カラシク！ 狹いは… ロングアーチへり！」

「なに？ おい！ おまえ、仲間がいんのか？ おい、答える！」

? 「ああね～？ 最後に・・・あなたはまた・・・守れない」

「ちくしょおおーーー！」

? 「きやあああ、危ない人～」 そういうと、なぞの女性は消えた。

キヤ「反応口ストです」

「ちくしょー誰か、ヘリを守ってくれ」

side, vi-tertial out

side?????

「5 - 4 - 3 - 2 - 1」

「シユート」

side???? out

くせう、テストまだだつてのに、

「いけ！アリオス！」 僕はアリオスを起動した。

「トランザム！」

side????

「命中したか？」

「まつて今確認中」

「あれ？まだ飛んでる？」

「危なかつた、こちらウイルズ・レータ、ギリギリ間に合いました。」

「

そこにいたのは、体が真っ赤になつている人だつた

s.i.d.e????? o u t

僕はトランザムしながら「鉋、セットアップ！」

「間に合えええええ！」

そう叫びながら、僕は、鉋を盾のよつこにして砲撃に向かつて突つ込んだ

「危なかつた、こちらウイルズ・レータギリ間に合いました。」

「撃つたのはあそこか」僕はあるビルに向かつて直行した

「よつ」

s.i.d.e?????

「よつ」

そう声をかけられて血の氣が引いたなぜならさつきまでへりにいた
真っ赤な人が今日の前にいるのだから

s.i.d.e.??.? o u t

「そんなに驚かなくてもいいんじゃないかな？」

「ば、バインド？」

「く」

「まあ、痛い」とはしないから、話聞かせてくれよ。まず、お名前
は？」

「私は、陰の九星が一人。ヴィーナス。」

「俺は、同じく陰の九星が一人。ジュピター」

「あんたらの組織名は何だ？」

「それはいえない。」といったのはジュピター

「そりゃいじやあ」といいかけて、やめた。

「鉋！」

〈了解〉

ガキン！

「今度は何だ？」

「私は『バインド』え？あれええ？」「こいつ、いがいとデシッ子だ

「せこ、ねづかは？」よくみると見た田小学生だ

「私は陰の九星が一人、神速氷将のマー・キユーリーだ」

「それはそれは、一つ頼めでいいかも。」

「しまつたあああ！！！」こいつ大丈夫か？

はやで一へり攻撃したやつらはもうなつた？」

一
こめん逃げられたわ

卷之三

は、そうか、なに早く帰ってきて

「おひ」と俺はそう答えて通信をきつた

גָּמְנִים

「まあ、お前らは、なんか嫌いになれなくて」と笑った

ヴィ「面白い人だね」

ジュ「いいのか本当に」

「ああ、いいから早く行け。俺がなんとかごまかしてやるかい

ジユ「すまない」

「おひ、またな」と俺は微笑んだ

マ・ガイ「…………また／＼／＼／＼」なぜか、顔が真っ赤だ

「どうした熱でも」「ないー」「そんな大きな声出さなくとも」

「まあ、とにかく早く帰れ、早くしないと、金の死神と、管理局の魔王がくるからな」

俺がそういうと、3人は口々にお礼を言つて帰つていった。最後に、マーキュリーが

「名前は？」

「は？」

「お前の名前は？」

「ウイルズ、ウイルズ・レータだよ

「わつか」そういうと、マーキュリーも帰つていった。

「はあ、散々な休日だよ。ほんと」「そういうながら俺は帰路についた

新機動六課の休日（後書き）

ヴィヴィオまつたく登場しなかつたですね^ ^ ;

今度は登場させます。なのはがママになる話ですね。

近いうち更新するのでお楽しみに♪

最後に「月光閃火」さん、オリキャラありがとハイヤーました。早く使わせていただいています。

それでは、次回へ take off

原作者が、なのがママになります。

それからひとつ敵との一戦も書きたいかな～なんて想っています。

なのは「なんですかー！保護した子がいなくなつたーー？」

「おじおい、落ち着けって、まだあいつらって決まつたわけじゃないんだしよ」と僕は言つた

ゴーノ「やうだよなのせ、今から教会にこつてみよ」

なのは「うそ、やうだよね。落ち着かなくへりや」

ゴーノ「とにかくで、僕となのはは、教会に行つてみます」

はやて「わかつたよ、ほんならお願ひな

「はあ、」

はやて「どうしたん、溜息なんにして

「こや、昨日へつをせつたせつ、明らかに選者つてわけでもなきやうで」

はやて「明らかに…・・・もじかして余つたん？」

「こや、なんとなくだよ、なんとなく」~~まあこままで~~、報告ではす
ぐ逃げたことになつてんだつけ？

はやて「ふーん そんな人を疑つよつな田はやめよう

「だから、なんとなぐだよ。な・ん・と・な・く・」

はやて「やままで言つなんらええけど」なんとか引き下がってくれた

それから、なんとなく、街へ出かけてぶらぶらしてると、

「ふわわ！」

「はいっ」と声がしたまつをみると、

「貴様！分かってるのか、この私は、陰の九星、神速氷将のマーク
ユリーだ！」

「おこ、お前、またまた「一つ名」馳走様です」と僕は、一瞬に四千
を合わせた。

「ななな、何でお前がいるんだああああああああああああああ
子だね！」

「はいはい、ちよつとみんなの迷惑だからひつひつひつひつ

「私は、子供ではない、はなせー、このやうー」

「はいはい、文句は後で聞く、おとなしくつきて来い」休日最初の
出会いがこいつか、はあ、不幸だ・・・。

s.i.d.eのは

シャツハ「すいません。」うちの不手際で

「こや、別にシャツハセのせこじなことですか？」

ゴー、「じゃあ、手分けしてその辺を探さつか、子供の足跡をさつ遠くはないなこはずだし」

「やうだね」

それから私たち半分ナをして、保護した子、ヴィヴィオの事を探し始めた

した。

探し始めてから三十分ほどだった頃

「あ」

「ヴィ、ヴィ、と泣き声になづながら逃げみつけた

「ヴィ、ヴィ、ビウしたの？」

「ママがいなーの

「ママ？」

「うそ、ママ」

「せうか、なり、私がママなんつかへ」と私が叫んだとき、ゴー
ノ君が来た

「なのは、見つかったの？」

「うそ、ちよび今ね

「なのはママ？」

「うそ、なのはママ」と私が微笑みながら答える
「じゃあ、じゅじゅぱぱだ」とウイヴィオがパーと顔を明るくして
いった

ユ・な「え・・・／＼／＼

「へ、変なこと言わないでよ、ユーノ君とはそんな・・・／＼／＼

「ユーノパパ」とウイヴィオは私たちの気も知らずに一人ではしゃ
いでいる

「なのは、あきらめよつ、まひ、こんなうれしそうなんだから

「うそ、わうだよね

s.i.d.eなのはout

「で、お前は句でこんなこといふ

「それはこいつのセリフだ、お前にそなんでこんなこといふ。僕
とマークリーは、すばらしい追いかけっこを演じてこのうれしさで疲
れ果て、そこいらへんにあつたカフェで休んでいる

「まあいいけど、ほんとデジだよな

「デジとま句だー」とまるで小学生のように口を尖り出す

「もしごぶつかつたのが僕じゃなかつたら、びつしたんだ、一いつ知ちでじ一寧こ、もし内内の組織のやつらだつたら」「まかま

？「誰が内の組織だつて？」「あれ～？おかしいな、こんな殺氣を食らひつ覚えは眞無なんですが

「うわ、スバル！」

ス「今打ちの組織とか言つてなかつたけ」

「氣のせいだよ、そつ氣のせい

ス「ふうへん、それよつこの子は誰一まさか、れひつてく「きてねえ！！！」なんだ

「お前は向でそんなにがつかりしてんだよ」

ス「だつて面白こじやん？」じやん？て聞かれても困ります

マ「お前、誰だ、怪しこやつなら」の陰のくよ「わああ、ストップ」むぐりつう」と僕はあわててマークユニーの口をふさごだ

マ「何をする……！」

「お前おれの仲間に招待明かしてびつすんだよ」と僕はひそひそと話した

ス「ねえ～一人で何はなししてんの」

「こや、こつけ、俺の後輩子供でな「誰が後輩」黙れ…マーク

ヨコーツヒんだ

ス「へえ～面白ご名前だね」

マ「面白ことは何事だ！」

「ああ、もつ嘘はだめだつて、もつ口が暮れぬじ、」

ス「やうこえばやうだね、じゃあ、私はそれを歸るね」

「おひ

「で、お前はどうすんだ、帰る場所とかあんのか？」

「ないわけではないが、その・・・・・・」

「どうした？」

「あの、ウイルズの家に行きたい・・・・・・」

「あの～なんですかって家に行きたい？」

「家に行きたいくつたり、いや、そんなフラグ立てた覚えはない、といふことは、敵地の調査

「いこわけないだろー！――敵をほこどりぞつて通すわけにはこじやないんだよ！」

「おひ」と涙田になつて

「さうだよな、私は敵だもんな、仕方ないよな」ともつ泣きながら
言われるもんだから

「いいよ、来いよ。」

「え？」

「だから、来いって言つてんだよ、お前一人置いてくわけには行かないからな」

「いいのか？」

「何度も言わせるな」

こつして、敵幹部と一緒に泊りが始まった。

はい、今回お手伝いで、

更新の遅れですいませんでした。

ちょっと構想がまとまらなくて。

それでは次回お楽しみに^_^

敵といお泊り（前書き）

更新遅れています。すみません。

今日は短めです。

それでまじりで

敵のお泊り

「ただいま」と誰もいない部屋で言った

「お邪魔します」とマークユーリーが遠慮がちに言った

「そんなとこでじつとせづに入れよ

「うう、わかりました」

「ごめんな、大したものないからや、ちよつとまつてて、今夕飯作るからさ」そういふと、僕はエプロンに着替えてキッチンへ行つた

「いいよ、そんなに気を使わないで」

「まあ、今日はお前が窑だしな、いいから黙つて待つてろ」

と僕は、マークユーリーを黙らせて、キッチンへ向かつた

「さて、どうしよう、まあ、ベタだナビカレーでいいか

でもな、どういう風の吹きまわしだろう、敵幹部が家にいるなんてな

s.p.eマークユーリー

部屋で待つててって言われたけど、どうじゅう……／＼緊張する

「ウイ「もうすぐできるからな~」

「はい！」あまりに緊張しそうで、とんでもんな声を上げてしまつた

「 ウイ 「大丈夫か？」

「大丈夫です・・・」

（今日ぐらい、敵も味方も関係なくす）していいよね）と私は心中でそう思った

sideマーキュリー out

「というわけで、完成」パチパチパチ

「わーい、」とマーキュリーも喜んでいる

「それでは」

「「いたままーす」」と一人で合掌

「うーん、今日も成功」

「おーしゃー」マーキュリーも喜んでくれてよかつた

それから、一人でゲームしたり、テレビ見たりしてあつとこう間に
終身時間

「マイキューは俺のベッド席つてへん

「ウイルズはビーフるの?..

「俺はいいで瀛の」とソファーを指差した

「だめだよ、」

「いやいや、ですがに一緒にまずこつて「一応わたくしも一健全な男子であるわけで、間違いを起こさないとは限らないわけですよ

「ここから」で瀛

「うう」見つめられると男は弱いわけで。。。

「わかった。。。」折れました

「んじゃ、電気消すぞ、おやすみ」

「うそ、おやすみ」

—videoマイキー

(私なんて大胆なことしたんだろ。。。／＼だつて、一応男の人
だよ、)

グウーン・・・

「もう廻らなかったんだ」「なんか一人で騒いで馬鹿馬鹿しい

「でもいつか、おやすみウイルズ」

sideマークylie-out

敵ともゆつ（後書き）

日常でもシーンを書いていたんですが、やがていつまでもなことですね。

次回からひとつシリアルとしてつかな、と感つてこまか。

それでは次回へ take off

六課壊滅～序章～（前書き）

六課壊滅を書いたと思ひます

更新送れてほんとに申し訳ありませんでした。

六課壊滅～序章～

敵さんとのお泊り会からはや数週間。

あの時は『えび』いたマーキュリーは帰ってしまった。

「朝飯ぐらこ食つてけばよかつたのに」

「え？ 何だつて？」と隣に座つて居るのはせんが聞いてきた。

「ああ、いつけの話」

「む～氣になる～」

「あ～は～は～、それより、今日は、予言のことが起つたやうな日ですね」

「やうだね、氣を引き締めなきや」

予言とは何か、それは数日前にとかのばる

僕たちは、海の3提督、クロノさん、僕と六課の隊長たちで、聖王教会に行き、これからのことについて話し合つた。

そのとや、カリムさんの予言に新たなものが現れた

～世界は、混沌に包まれ、崩壊の一途をたどる、星の光を持つもの、雷をつかさどるもの、夜天の主、4つの羽を持つもの、これに立ち向かう、しかし、道半ばで絶望し、再び世界は・・・～

「道半ばで絶望つて物騒な話ですね」と苦笑気味に言つと

「笑い事じゃないよ、分からぬことだらけだし、夜天の主はたぶんはやでちゃんだし、星のなんたらつて私でしょ？雷つんぬんつて言つやつはフロイトちゃん、でも、4つの翼はわかんないな」

「そうですね」たぶんそれは僕だ、今僕はガンダム4機を本格的なユニゾンデバイスにしている。

だから翼とは4機のガンダムだろう。でも、このことはみんなには言えない。なぜなら、これは戦争の兵器、非殺傷能力が当たり前のこの世界では、あまりよく見られないやつだ。

「お互いがんばりましょう」

「うん」やつこつて僕らは別れた

数時間後

はやて「カリムから、新たな予言が出たつて連絡が入った。この前行つたメンバーは至急一緒に来てくれ」

「「わかりました」」

カリム「新たな予言がでました」

「再び世界は混沌に包まれる、しかしそこに、数多の英雄が集い、命の輝きを放ち、二つの拳があらゆるものを持ち消し反射するだろう・・・そして、聖王と星の光がぶつかり戦いは終焉を迎えるだろ

う

「数多の英雄?」とはやでがいつた

「わかりません。しかし、世界が滅びない可能性が高くなつてきました。」

「たぶん聖王はヴィヴィオだ、そして、星の光はなのはさん、二つの拳は、イマジンブレイカーとアクセラレータでしょう。」

「はじめの一一つはいいとして、あとの一一つは何?」とフロイトさん。ヴィヴィオはいいんですか?

「まず、アクセラレータ、僕のベクトル操作の元になつた人物です。そして、イマジンブレイカー、

これは能力名として本名は別にあるんですが、この能力は、異能と呼べるものすべてを打ち消してしまふ能力です。つまり、僕たちが今使つている魔法もすべて打ち消せます。」

「それなら最強じゃない?」となのはさん

「いえ、確かに能力はすごいですが、考えてみてください、打ち消す以外何の力のない、ただ普通の人、回復魔法も打ち消してしまつため、傷だらけなんですよ。しかも、その力は右手にしかありません。」

「右手?」

「はい、右手のみです。なのはさん、もしあなたにその力があつたとして、それだけで戦えますか?」

「私は・・・」

「まあ、分かってくれればいいんです。力がすべてじゃない、それはもう誰さん知ってるじゃないですか。」

side ???

? 「二二二二だ?」俺は確か・・・フィアンマとの最終決戦で、相打ちになつてそれから・・・

? 「おイ、ここ何処だよ」俺は、打ち止めを助けるために戦つて、そして、田の前がまぶしくなつて・・・。

六課の面々が「話していた頃、物語のキーパーソンがよつやくこの世界に降り立つた。

side ??? out

六課壊滅～序章～（後書き）

序章といつておきながら、敵が出せませんでした。

本当に申し訳ありません。更新遅れてしましました。

誤ってばつかで下さいません。

次回もがんばるのによろしくお願ひします。

六課壊滅～序章～（前書き）

かなりの期間が開いてしまいました。せんとこすしません。

都合により、4～5部作になつた感。

時間はかかるけど、気長に待ってください。

六課壊滅～序章～

は「まず、FW陣は、スターズ、ライトニングは関係なく、ミッド地上にある、時空管理局の地上本部の護衛を、隊長たちは、新機動六課の防衛、スカリエット率いるナンバーズ部隊は、ミッド地上に潜入、首謀者をできればたたいてくれ」

全「了解！」

「さて、最終メンテだ」そう、今僕はデバイスマンテの真っ最中なわけだ。

結局実戦では使っていない、スナイパー・ライフル型のトリシューラはシャーリーたちに頼んで、元に戻してもらつた。「これでまた戦えるな」僕は決着をつけなければならぬ。トリシューラを真つ二つにした、クリスに、なんだかんだで仲良くなつたマー・キュリーに、その他大勢の敵たちと

「大丈夫かな」思えば僕はこんな戦いとはまるで関係ない世界で生きていたことがあつた。毎日決まつた時間に起き、学校に行つて、友達とバカ騒ぎして、そして帰ってきてゲームしたりネットしたり勉強したり、「こんな僕でも世界が救えるのかね・・・」「おっと、ちょっと感傷に浸つてしまつた。

? 「ウイルズさん

「はーい」扉を開けると、スバルがいた。

ス「ウイルズさん、私大丈夫でしょうか。」こいつも心配なのか

「大丈夫だよ、仲間を信じる。もしピンチになつても、絶対に誰かが駆けつける。もし誰も来なかつたら、一番来て欲しい人の名前を叫ぶんだ。叫べなかつたら、心で訴えるんだ。分かつたか？」

ス「はい！」

まあ、僕にはこれぐらいしかいえないけど、さて、まずはどのゴービンで行こうか・・・・まずはこれだな。

s.i.d.e?..?

「さつきから見慣れな場所だな、いつたいこ」はど」だ？」

「つたク、なんだこ」は、あン？」と聞き覚えのある声が

「一方通行！」「あン？上条当麻か」一人がお互いを認識しあつた
そのとき、

「誰だー」「こ」は、ミッド地上本部だぞー。」

「なんだそりやー」「抵抗するなら」男の一人がそういうと、いきなり杖を構えた、直後、ビームらしきものが飛んできた「つたくしやあねえな」あきれながら一方通行は電極のスイッチをオンにした。いつもなら反射で対処できるのだが、なぜか、これは反射ではなくはじく形になつた。「あン？ロシアのときと同じ形だな」一方通行は魔術に対して使用したときと同じ疑問を抱いていた。「こ」は俺たちの世界とは違そうだな」「そんなことはかんけいねえ」そう

「うと、上条は右手を前に出した、ガキンといつ甲高い音が鳴り響くと、そのゲームのよつなものは打ち消されていった。

「な、何者だ貴様ら！」

「名乗る必要なんかねえよー！」の三下が！」 そうこうと、一方通行が拳銃で男たちの足を撃つた

「これで少しばか動けなくなるだろ」 そういうと、一人はミッド地上に向けて走つていった。

何かいやな予感がする。上条はそう感じていた

side上条、一方通行 out

は「これより、ミッションを開始します！」

全「了解！」

「セラヴィーセットアップ、隊長たちは、先に、切り込んでください。ここは僕が死守します！」 うして、予言の日が始まった。そう、とても長く感じる、一日が・・・。

六課壊滅～序章～（後書き）

はい、いまだ敵が出てきませんでしたが、一応構想は頭にあります。

だから、一応今度は、一週間の間には更新する予定です。

それでは、次回「六課壊滅～破～」にtake off

六課壊滅～破章～（前書き）

遅れていますませんでした。

これより、破章始まります。

六課壊滅～破章～

「圧縮粒子開放！」そういうと僕は、セラヴィーのダブルバズーカからビームを放つた。あたり一面のガジュットをなぎ払っていく。

は「なんや、あの性能・・・」圧巻だった。ウィルズがでか物になつてひとり空で戦つている。

な「あ、危ない！」私がそんなことを考へてるうちに、周りを囲まってしまった。

な「ウイルズ君私が加勢に『いい、来なくていい！』なんd「何でもだ！」

「奥の手のひとつを使ひぞーセラヴィー」（ア解）

sideなのは

私が見たのは、六本の腕に一本ずつビームでできたサーべルを持つウイルズ君の姿だった

は「なんや、あれは・・・」

フェ「でも、」押されている。数で圧倒されているのだ。

な「やつぱり私が」そういうかけたとき、

sideなのはout

「やつぱつこれでもあつこ、じいでは、まだ・・・」

(上だー)

「ぐーGNフィールドー」GNフィールドをつまく使い、少しづつ
だがガジェットの数を削っていく。

そのとき、敵の奥のほうに、

「マーキュリーか・・・。」

「セラヴィー、ちょっと休憩してていいだ。」

(わかつた。)

「ふう、」僕は、普通のバリアジャケット姿に戻り、

「ケルティムセットアップー！」

(オーライ)

「ケルティム、目標を狙い打つー！」

sideなのは

「姿が変わった・・・。」

そうしてみると、

は「」れより、隊長3名は、地上本部、もとい、敵組織の殲滅に向かいます。その他の六課メンバーは、はじめの命令どおりに進んでください

(了解！)

私たちには、敵組織、組織名「オリオント」への進行を開始した

Sideのはout

「シーラードビット」

(了解)

ビットを駆使して、あたりのガジェットをあらかた片付けた

「ケルティム、休んでいいぞ」

(わがつた)

「ニニニニ」

「ウイルズ」一人の間に緊張が走った。この間はほんの数秒だったかもしれない。だが、僕たちには数時間にも感じたのだった。

マー キュ リー の 体 が ぴくつ と 動 いた。

「トリシユーラー止めるやー（せこ）総対止めるやー（せこーー）トリシユーラ、セットアップー！」

なつかしのバリアジャケットと、なつかしのトバイス。

ガキン！と打ち合つた。双剣と槍ではリーチの面ではひかりに歩がある。しかし、速さの面ではあからに歩がある。いわゆる一進一退の攻防とやらをやりてこるわけだ。

「なぜお前があの組織にいる」

「そんなこと……」

「なぜお前と戦う必要があるー。」

「・・・・・」

「（）のままでは決着がつかない」

「だから、」

「しかたない」

「フルドライブー！」

「デライブイグニッショーンー！」

「これで決めるやー！」

「わたしだって・・・」

僕は、周りの魔力をトリシューラに集めていく

「エターナル・・・」

「フォトン・・・」

「「スラアアアツシユ！――！」」二人の渾身の一撃はぶつかり、
そして・・・

僕立っていた。マークリーを抱えて。

「大丈夫か？」

「負けちゃったか・・・。」

「でも、よかつた、これでお前もやつとこの戦いの運命から・・・
「危ない！」え？「そのとき僕は自分の恨んだ。自分が油断してな
ければ避けるのは容易な攻撃。自分の油断が、慢心がまさか、

「よ・・よかつた・・・ゴバア」マークリーを重症を負わせるこ
とになるなんて・・・。

「ふむ、いらなくなつた、ものは、即座に消さないとな

「テメエ今なんて言つた」

「負けたものなど、もはや不要だと「取り消せ！」なに？「マーク

ユリーが不要だといつ言葉を、即座に取り消せ！

「トリシューラ、ちよつと、休んでいいぜ」そうこうと、僕は、マーキュリーの元にき、「お前のこのバイクス借りるな」

「お前、名前は」（ヘル・・・・）

「そうか、いい名前だ」

「行くぜヘル！敵討ちだ！」

（わかった・・・）

「ヘル、セットアップ」その刹那、すごい吹雪が僕の体を包んだ
「これは、」とても鋭利的なデザインの、言つならば、二人のバリ
アジャケットを足して二で割った感じの姿になつた。

「これでも、双剣の使い方は、少々心得ているのでな！」

「ならば来い！」こうして、俺と、クリスとの2度目の戦いが始ま
つた。

side FW陣

ティ「ここで待機しましょ」今こりは、地上本部前、といつても昔
はというだけである。

いまは、オリオントの本拠地。

ティ「ここから分かれて戦うわよ」

ス・エ・キヤ「了解」

でも、私は今判断を後悔した

なぜなら・・・。

「ようこそ、私は、陰の九星が一人ジュピターだ」

待ち伏せされていたからだ・・・。

sideエリオ・キヤロ

「私は、陰の九星が一人、ヴィーナスだ」

sideスバル

「ギ、ギン姉」

「ん?私は、陰の九星が一人、マーズだ」

sideシグナム

「またお前か・・・。心底あきれたように言つと

「またとは何だまたとは。」

「集うは光、放つはビーム！」

レガシイ・トライアル

今、それぞれの場所で、決戦が幕を開けようとしていた。

次回の、予告？

「貴様はまだまだ甘い！」

「うねるーーそれでも、お前だけはー」

「ならば仕方ない、こちらにもひけぬ理由がある」

「譲れないものは」ちらりともあわぬ。」

～ちょっと進んで～

「集え光よ！ · · · 」

「いつけええええ！－！－！－！」

「スター ライト、」

「エターナル」

「スラアアアアアアッシュ…!…!…!」

予告通りにならず一部変更になる場合がありますので、ご承く下さい。

六課壊滅～破壊～（後書き）

どうでしたでしょうか、マーキュリーが瀕死ですね。

これからどうなるんでしょう。

次回も波乱の予感？

それでは、次回へ take off

六課壊滅～破章・ウイルズ×Sクリス～（前書き）

かなり間が空いてしまってすいません。

構想がうまく練れなかつたので遅くなつてしましました。

それでは、ウイルズ×Sクリスマススタートです！

六課壊滅／破章・ウイルズVSクリス♪

「機動六課所属、ウイルズ・レータ三等空尉」

「劫火の将、クリス」

「参る！」

「行く！」

「（ウイルス、前置きなしだ！オッケー相棒……）いくぜえええーーー！」

反射と思考の融合、ベクトル操作のフル稼働、治癒能力をできる限りフル稼働して、僕は、ただ、斬りつけた……。

「お前だけは、お前だけは……絶対に許さない……」

「こちらは許して欲しいわけではないのだがな」

ガキン！ガキン！一撃、一撃打ち合わせていく

「なかなかやるではないか、だが、まだ……」

「こんなもんじゃなねえだろ！ そうだろ、ウイルス！」

「なに？いきなりパワーが……しかし」

「一気に行くぜ！カートリッジロード」

(・・・ロード・・カートリッジ・・・。)

「エターナル・・・スラッシュユーー！」

ドゴオオンン！…爆風・・・。

「やつたか、？」

「なるほど、なかなか、だが！貴様はまだ甘い！」

「なに！？」

「こちから行かせてもらう！劫火・・・一閃！」

「ぐう・・・やはり、実力差はまだ・・・」

「まだまだいくぞ！、劫火弾」そういうと、無数の炎の弾がこちらに向かつて四方八方から飛んできた。

「いくら実力差があるとも、お前だけは、お前だけは・・・！」

僕は、ある弾は避け、ある弾は双剣で裂き、ある弾は弾き、クリスへと接近した

「ならば仕方ない、こちらにも避けない理由があるのでな！」

「譲れない理由はこちらにあるー！」

「セカンドフォーム、モードリース」

(OK・・・スピアフォーム)

「一閃必中！雪華一閃！」クリスに命中し、爆煙の代わりに、空に一輪の花が咲いた

「はあ、はあ、はあ、これで……」「今のせわすがにやばかつた」

「」の私に、本気を出させるなど、光栄に思え、」の技を見たのは、今まで数えるほどしかない」

「デス＝クラツシャー、その名のとおり、殺す・・・業だ！」

「ぐあああああ！」

「終わつたか、なかなか「・・・・・」ソヤリツしゅ」「？」

「危なかつたぜ、治癒能力、異常な反射、ベクトル操作、この3つをすべて使い、ここのザマだ……。」

「なぜ、死はない・・・。これは、必ず死を与える「だが、結果的に俺は死んでない。受け止めろよ、お前は完璧でもなんでもない・・・、所詮、神になつたつもりの人間だ！」

「そんな・・・、バカな！俺は、私は！」

「バインド」俺のバインドが、クリスを、捕らえる

「ありえない、私の戦いが、たかが人間に・・・、そんな」
哀れだよ、自分は天才だ、完璧だ、そう勘違いして、人外気取つて
たんだからな

「集え、星の光よ・・・。」

俺の周りに、魔力が集まつてくる

「ツインブレード」

俺はテバイスを通常モードに戻し、

「なのはさん、あなたの無茶、借りますよ?」

「ト・・・ランザム」そういうと、俺の体を、青白い光が覆う、これはガンダムの能力と同じだが、GNドライブがないので、体の潜在能力を引き出すために、8年前から欠かさず毎日やったトレーニングで身につけた業だ、でも、これは諸刃の刃、使った後は一定時間恐ろしい疲労感と、魔力を失う。

「うがあああ!!!!」クリスは無理やりバインドを引きちぎり、こちらに向かつて突進してきた

「しねええ!!!!」

「哀れだな、お前らしくない……。もつといい戦いがしたかつた・
・。

「劫火一閃、バーストアタック！――！」クリスが最後のむちゃくち
やな攻撃をしてきた。

魔力の光が、ヘルの刀身に集まっていく……。

クリスの一撃を片方の刃でいなし、もう一方で斬りつけ、
いなした一方でクリスに刺し

「スピア！」きりつけた一本を、セカンドフォームへそれをクリス
に突き刺し、すぐに刺してあつたもう一本と一緒に抜き・・・

「サイス！」二つの剣と槍を魔力で大きな鎌にする

その姿はまさに、ヘルのなにふさわしい姿だった

「この私が・・・、こんなやつに、こんな甘い戦い方のやつに――！」

「受けてみる！」

「これが！」

「俺と、マーキュリーのいや、俺たちの」

「戦いだ！」

「スター ライト・・・ エターナル・・・ フォトン・・・。」

「ぐああああああーーーーーーーー」

「終わった・・・。」俺の意識は、ここで途絶えた。

sideはやて

「なんや、あの大爆発は・・・。まさか・・・！」

sideは使っておこなう

六課壊滅～破章・ウイルズ～Sクリス～（後書き）

なんとクリスと決着をつけられました。

次は、シグナムさんでも書い「」と思います。

感想＆意見募集中です。

それでは、次回へ

take off

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8519m/>

魔法少女リリカルなのは 守るための戦い

2011年1月5日17時36分発行